月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.24



シリーズ最新作『閃の軌跡』の開発現場に潜入！

巻頭特集
英雄伝説 閃の軌跡 潜入レポート

ボーイッシュな少女が華麗に変!?

英雄伝説　零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～

ツァイスの暴走博士にドロシータジタジ!?

英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット

《剣帝》の物語、ついに最終話!!
レーヴェの心が行き着く先は……

空の軌跡外伝 レーヴェ物語

おいでませ珍獣ハンター！

みんな集まれ！ファルコム学園

jdk バンドボーカル・コテカナの

コテ放題♥

ファルコム jdk バンド ドラマー・オカジの

人生半キャラずらし

ティオのファルコムラジオ めんどくさいです…でもがんばりますの舞台裏

ファルコムニュース

Falcom FanArt Collection



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

リベール通信緊急号外

英雄伝説 閃の軌跡 潜入レポート

ついに発表された『軌跡』シリーズ最新作『英雄伝説 閃の軌跡』！ 今月から本コーナーにて気になる開発状況を逐一報告していこう!!

リベール通信
帝国支部
アッシュ洋平
リベール通信帝国支部の新米記者。先輩のナイアル・バーンズにあこがれ、日々スクープを追う

SCOOP! 『閃の軌跡』は競走馬育成SLGだった!?





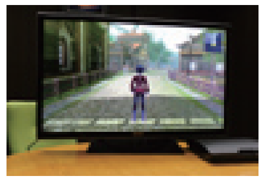
閃の軌跡とは

『軌跡』の物語はついに帝国編に突入！ 日本ファルコムを代表するRPG『軌跡』シリーズの第6弾。これまでの作品でも重要な位置にあったエレボニア帝国を舞台に、新たな英雄たちの物語が描かれる!!

■『英雄伝説　閃の軌跡』
メーカー：日本ファルコム
ジャンル：ストーリーRPG
機種：PlayStation3、PlayStation Vita
発売：2013年発売
価格：価格未定

帝国はホントにでかかった！ 目の前に広がるゼムリア大陸

突然、馬の画像を見て驚いた人も多いことだろう。競走馬育成SLGというのは冗談として、なんと『閃の軌跡』では移動手段として馬が登場！ 掲載した写真を見てもらえばわかるように、本作ではフィールドも街もスケールがハンパない!! そんななかを馬で駆け抜けるのは、最高に気持ちよかったですよ。今回は視点がこれまでの俯瞰ではなく、キャラを背後から見た第三者視点に。臨場感も今までないくらい上がっています！





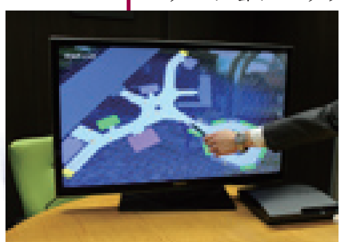




▶360度フリーカメラ

CHECK! エリアマップも3Dで立体的に！

フィールドが完全3Dになったのにあわせ、ナビゲーションマップもちゃんと坂などが再現されるようになった。塔やダンジョンといった立体的な構造のところは、これのおかげで位置関係がすごくわかりやすくなりそうだ。



◀マップの高低差もばっちり再現！ ちなみに写真の手はドギまっしぐらさんのもの。





▶キャラクター



ポリゴンになりキャラもイキイキと！

キャラクターがポリゴンになり、しかも頭身が上がったのも本作のポイント！ これまでのチビキャラによる演出もよかったが、今回は顔の表情などもしっかり再現されるので、よりキャラに感情移入できる。写真では、現在判明している4キャラのフィールドアクションを公開！ 躍動感あふれる動きは必見ですぞ。



CHECK! 女主人公の制服の背中にはこんなワンポイントアクセが！

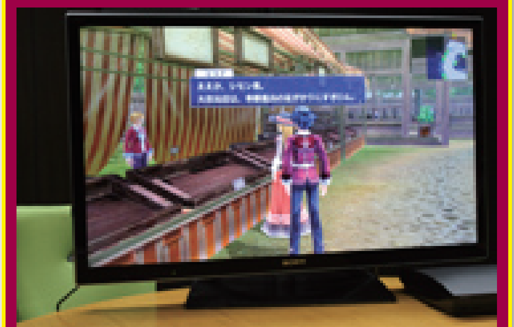
なんと女の子キャラの制服の背中には、大きなリボンが付いていることが判明！ このようにフルポリゴンでキャラが描かれることになり、洋服のディテールなどもこれまで以上に細かく設定されているようだ。



◀普段は髪で隠れているが、アクション時にはばっちりとリボンが見える。こういった細かいデザインにも注目したい。

今月のこの1枚 懐かしのあの人がなんと帝国に!?

街の広場を歩いていたところ、気になる人物を発見！ 流暢な関西弁と強気な態度は、リベール王国のボース市にいたあの人か!?



▲強引さは本作でも変わらない模様。今回はどんな活躍（？）を見せるのか、乞うご期待。

▶アクティブボイス

イベントの演出もさらに進化！

開発中ということでイベントシーンはそれほど見せてもらえなかったが、そのなかから貴重なショットを。イベントでは、場面に写っていない人物がしゃべると顔付きでセリフが出るようだ。顔もちゃんと表示されるので、表情もちゃんとわかる！





※画面は開発中のものです。実際の商品とは異なる場合があります。

英雄伝説　零の軌跡
～午後の紅茶にお砂糖を～

著：むらさきゆきや
イラスト：窪茶



第10話『シュリ・ラプソディー』

新市長ディーター・クロイスにより、西ゼムリア通商会議が開催された。

エレボニア帝国やカルバード共和国からクロスベル市に要人たちが集まってくる。

世界のトップたる人物たちを一目見よう、歴史的瞬間に立ち会おう、という観光客が押し寄せ、街は大騒ぎになっていた。

そんな高揚した雰囲気のなか――

中央広場へ、特務支援課の面々はやってきた。

青と白のジャケットを着た、ブラウンの髪の青年ロイド・バニングスは、クロスベル警察の特務支援課でリーダーを務める若手捜査官だ。

「かなり賑わってるな。まるで記念祭みたいだ」

「本当、すごいわね。これだけ大勢の人がいたらトラブルも増えて当然だわ」

うなずいたのは、パールグレイの髪の美しい少女だった。名をエリィ・マクダエルという。このクロスベル自治州の議長を祖父に持ち、その補佐をしていたこともあるほどの才媛だ。

「あら？　もしかして……あそこにいるのは……」

「どうした、お嬢？」

彼女の視線を追いかけつつ、体格のいい赤毛の青年――ランディ・オルランドが声をかけた。元警備隊員で、ときどき素行不良ではあるものの、頼れる兄貴分だ。

エリィがつぶやく。

「……今、シュリちゃんがいたような気がして」

「シュリが？」

ロイドもエリィの見ている先に視線を投げた。人混みのなかから、知り合いの顔を見つける。

髪を短く切って、ズボンを穿いている少女だった。まるで少年のような格好をしているが、アルカンシェル劇場で稽古に励んでいる女優の卵だ。

まだ十三歳でしかないが、貧しい暮らしをしていたところ、大スターであるイリア・プラティエに才能を見いだされ、今や期待の大型新人である。

「ん？　アンタたちか」

「やあ、シュリ。今日は練習はお休みかい？」

「夕方まではな。今夜は夜に外国の偉い人たちを招いてのステージがあるからさ」

「なるほど。英気を養ってるわけか」

「オレは出番がないから関係ないんだけど……でも、イリアさんから休むように言われてさ」

ぶっきらぼうなしゃべり方も、男の子みたいだ。普段、他の人にはもうすこし愛嬌があるのだが、ロイドは特別に警戒心を向けられていた。

それというのも――

最初に出会ったときに、ロイドはシュリを男の子だと勘違いしてしまった。

すばしっこいシュリを怪我させずに捕まえるため、胴体を掴んだのだが……女性だと気付いていれば触らなかったところに全力で触ってしまった。

それ以来、どうにも距離のある関係が続いている。ロイドとしては面目次第もないところだった。

シュリが睨んでくる。

「ふん……アンタたちは今日も仕事かよ」

「ああ、通商会議の期間中は各国の要人が来てるし、観光客も多くなるからね。警察官が休みを取るわけにはいかないよ」

横で聞いていたランディがぼやく。

「やれやれだぜ。それにしたって、もうすこし休みが欲しいね」

エリィが苦笑しつつ、生真面目なことを言う。

「仕方ないわ。いつも以上に支援要請が来ているんだもの。通商会議に参加しているのは、いずれも歴史を変えうるような人物ばかり……警戒して警戒しすぎるということはないわ。警備に当たっている警察官たちが任務に集中できるよう、街中のトラブルは私たちが解決しないとね」

「ああ。そういう活動のひとつひとつは、きっとこの街（クロスベル）をよくすることに繋がってるはずだ」

ロイドは決意を新たにした。

シュリが溜息をつく。

「いいよな……」

「ん？　どうしたんだ、シュリ？」

「やることがあって羨ましいよ。どうにも、休みは苦手でさ。退屈すぎるし、オレなんか、ぜんぜん演技ができてなくって、あれもこれも練習しとかないとって……焦るばっかりなんだよな」

「なるほど。でも、休むのはイリアさんの指示なんだろう？」

「もちろん！　そうじゃなかったら、どこでだって……まぁ、イリアさんに言われたから、隠れて練習なんてしないけどさ。はぁ～……なぁ、今、何時だっけ？」

「え？　えっと……12時5分だな」

「なんだ、そんだけしか経ってないのか。あと3時間と55分もあるじゃん」

　シュリがうめいた。

　エリィが眉をひそめる。

「……だいぶ気が急いているようね」

　ランディが肩をすくめた。

「仕方ねえさ。アルカンシェルの一員ってだけで、並大抵のプレッシャーじゃないと思うぜ」

　ロイドは舞台のことはわからない。

　なにも手伝えることはないが、彼女の顔色を見ていると、ついつい心配になってしまう。

「大丈夫か、シュリ？」

「ん？　ああ、当然だろ。オレはイリアさんやリーシャ姉に鍛えてもらってるんだ。絶対に失敗なんかしない！」

「そういう意味じゃないんだが……」

　ちょっと気負いすぎではないだろうか？　と思うロイドだが……もう彼女はプロなのだから素人の自分が意見するなんて失礼だろう、と口をつぐんだ。

　シュリがふらふらと歩きはじめる。

「そろそろ行くよ。仕事の邪魔して悪かったな」

「あ、いや……またな、シュリ」

　彼女は片手を挙げて中央広場から、港湾区のほうへと歩いて行った。

　シュリを見送ってから、オーバルストアに向かう。

　ちょうど仲間が店から出てくるところだった。

　モスグリーンの帽子をかぶった少女は、ノエル・シーカー曹長。警備隊に所属しているが、現在は、特務支援課に出向している。

「ロイドさん、こっちです！」

「おつかれ、ノエル、ワジ」

「お待たせしたね」

　涼やかな笑みを浮かべたのは、ワジ・ヘミスフィアだった。不良グループ《テスタメンツ》のヘッドにもかかわらず、あれこれと伝手を使い、臨時の準メンバーとして支援課に所属している。

「フフ……君を待たせるなんて僕のポリシーに反するけれど、こればかりは許してほしい。後で存分にお詫びをさせてもらうからさ。勿論、ふたりきりでね」

「妙な言い方はしないでくれ。オーブメントの調整をしてただけなんだから」

「フフ……まぁ、そうなんだけどね」

「それで、もう終わったのか？」

　ロイドが問うと、ノエルが嬉しそうに目を細めた。

「はい！　ちゃんと調整してもらいました。《エニグマⅡ》のスロットを解放して、前に入手した《石化の刃》のクオーツをセットして――これで今まで以上に、皆さんのお役に立てます！」

「期待してるよ、ノエル。よろしく頼む」

「僕も同じかな」

「わかった。じゃあ、早速、支援要請を受けよう」

　ロイドの言葉を受けて、エリィが捜査手帳を開いた。

「えっと……

〝帝国からの演奏旅行で、共にクロスベルを訪れた演奏家が行方不明になった。

　至急、探し出して頂けないだろうか？

　詳しい事情は直接お話ししたい。

　クロスベル駅にてお待ちしている〟

　――こういう依頼みたいね」

「外国人の行方不明者か……不案内な土地で迷っているだけならともかく、なにか事件に巻きこまれた可能性もある。急いで探し出そう」

　ロイドの言葉に、全員がうなずいた。



　シュリは港湾区へとやってきた。

　とくに用事があったわけではなく、たまたま足を向けたら、ここだった。

　鉄柵に背を預け、時ならぬお祭りに沸く街の人々を眺める。

　花壇に囲まれたスペースで、イベントが開かれていた。

　ＭＷＬ（ミシュラムワンダーランド）のマスコットキャラクターである、みっしぃを大勢の観客が囲んでいる。

「みししっ☆　みんな、楽しんでる～？」

　ノリのいい子供だけが返事をした。

　みっしぃが首をかしげる。

「あれれ？　ちょっとしか聞こえないぞ～。みんな、楽しんでる～？」

　ワーッと、さっきよりは大きな声が聞こえた。最初は照れ

ていた大人たちも、今度は盛り上がっている。

　みっしぃが片手を突きあげた。

「イェ～イ☆　レッツ、ダ～ンス！　みっしぃダンスショーだヨ～！」

　着ぐるみなので、ドタドタした感じではあるのだが、その動きのなかにも機敏さが垣間見える。

　もしかすると、あの足運びの全てが演技なのだろうか？

　シュリは人垣の隙間から見えるみっしぃに、じっと目を凝らした。

（……オレは、あれより上手く演技できてるのか？）

　ぶんぶん、と頭を振る。

「はぁ～……ばかかよ……オレはアルカンシェルの舞台で踊るんだぞ？　みっしぃを参考にしてどうすんだよ……」

　イリアさんなら、なんでも舞台のヒントにしてしまうかもしれないが、まず自分には基本が大切だ――とシュリは思う。

　休み中に踊ったり歌ったりは厳禁されているが、指でリズムを取るくらいは大丈夫だろう。

　シュリは心の中で舞台で使われる曲を流し、たんたんと指で柵を叩いた。

　そのメロディが、唐突に始まった演奏で中断される。

「ラララ～ラララァ～～～……」

　港湾区の広場に歌いながら歩いてきたやつがいた。

ロイドより年上だろうか。美しい金髪で顔も整っている。いわゆる美男子だ。

　装飾過剰な白いコートはセンスを疑うが、持っているリュートは素人が見てもひと目で高級品だとわかった。

　そいつの歌が、シュリのリズムを上書きする。

「流れ行く　星の軌跡は……
　道しるべ　君へ続く……
　焦がれれば　想い　胸を裂き……
　苦しさを　月が笑う……
　叶うことなどない　はかない望みなら……
　せめてひとつ　傷を残そう……
　はじめての接吻　さよならの接吻……
　君の涙を　琥珀にして……
　永遠の愛　閉じ込めよう……」

　その場で一回転した。

　キラッと、こちらへウィンク☆

　思わず、シュリは身を引いてしまった。

「な、なんだ？」

「フッ……まだまだボクの演奏が聴きたいようだね」

「えっ？　それは、もしかして、オレに言ってるのか？」

「仕方がない。観客が残っているうちは曲を奏でるのが、真の演奏家というものだ」

「なぁ、だから、その観客ってのは、オレのことなのか？」

　シュリの問いかけなど無視して、彼は言葉を続ける。

「フッ……君は運がいい。偶然にもこの天才演奏家オリビエ・レンハイムのリサイタルに出くわす事ができたのだから」

「え、有名人……なのか？　とても、そうは思えないんだけど……名前とか聞いたこともないし、演奏も……」

「いいだろう。その期待の眼差しにお答えして《琥珀の愛》の2番を披露させていただくよ。存分に楽しんで、一生の思い出にしてくれたまえ!!」

「待て待て、今、イベントやってるだろ!?　そういうのって、マナー違反じゃないのか？」

「むっ？」

　ようやく、オリビエと名乗った自称天才演奏家は、動きを止(と)めてくれた。

　だいぶ騒がしいので、実際にイベントの邪魔になるかはわからない。

　シュリたちがいるのは、広場といっても端のほうだから、ほとんどの人に気付かれてすらいなかった。

　それでも――

「……それでも……誰かが頑張って演じてるときに、邪魔するようなことすんなよ」

　視線を中央のイベントに向ける。

　みっしぃが踊りはじめていた。

「飛び入りも歓迎だよ～。みししっ☆」

　着ぐるみなので、やっぱりドタドタしているのだが、不安な動きというものがない。熟練を感じさせる踊りだった。

　オリビエがビシッと指さしてくる。

「なるほど。つまり君は、こう言いたいのか……真の演奏家ならば、あのダンスを踊って見せろ、と」

「はぁっ!?」

「いいだろう、ボクも見ていたら、踊りたくなってきたところだ」

「いや……言ってねえよ!?　つーか、アンタが踊りたくなっただけだろ!?」

　そもそも、演奏家とダンスは関係ないと思う。

　しかし、彼は人の話を聞いていない。

「これを持っていてくれたまえ」

　シュリの胸元に、オリビエがリュートを押しつけてきた。

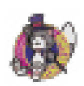
　思わず受け取ってしまう。

　だって、すごく綺麗で、高級品だと一目でわかる。こんなの、もしも受け取らないで地面に落としてしまったら、大変だ！

　ニコッ、とオリビエが嬉しそうに口元を緩めた。

　さっそうと柵を飛び越えてしまう。
「ヘイ、そこのみっしぃ君！　ボクが飛び入りしようじゃないか！」
「みししっ、ノリのいいおにーさんだネ〜！　カモン、カモン、エンジョーイ、ダンシーング☆」
「イェスッ!!」
「お、おい……ちょっと……!?」
　シュリはリュートを抱えたまま、その様子を見ていた。
　意外と上手い。演奏もダンスも独特だが、それゆえの魅力がある。
　しかし、これくらいの踊りができる者なら、アルカンシェル劇団にはいくらでもいる。
　そうではなくて……
　技術ではない部分にシュリは惹きつけられ、見つめてしまった。
（……すごく、楽しそうだな）
　ダンスの最中——
　慌てた様子でロイドたち支援課の面々がやってきた。緊張した様子でダンスを見つめる。
（……もしかして、なんか事件でもあったのか？）
　みっしぃが中央でぐるぐる回りはじめた。
「さー、みんないくヨ〜！
　エンジョーイ、みっしぃ☆」
　観客たちから大きな唱和があがった。そして、拍手喝采が起きる。
　オリビエとみっしぃが、ガッシリと固い握手を交わした。
「ハッハッハ……さすがだね、みっしぃ君。キミのダンシング・センスには、はっきり言って脱帽したよ！」
「みししっ、おにーさんも、とっても上手だったヨ〜☆」
　オリビエがみっしぃと話をしている。
　むしろ、旧知の友だちみたいに打ち解けていた。
　盛り上がったみたいだから、あれはアリなのか？
　イベントが一段落したところで、支援課のロイドたちが、ステージの前に立った。
　オリビエが溜息をつく。
「おや……どうやら、迎えが来てしまったようだ」
「ミュラーさんが待っています。一緒に来てもらいますよ」
　ロイドが一歩、前に出る。
　オリビエが、みっしぃのほうを向いた。
「みっしぃ君……すまないが、ボクはここで退散させてもらうよ」
「ありゃりゃ、それはザンネン〜。みししっ、今度はゼッタイ、ワンダーランドにも来てよネ〜」

「フッ、その頼み……いつか必ず果たさせてもらおう。この別れはあまりに辛い。だからこそボクらの絆はかけがえのないものとなるだろう！　また会おう、親友（アディオス・アミーゴ）!!」
　叫びながら、柵を跳び越えた。
　ロイドが目を丸くする。
「ああっ!?　ま、また逃げられた！」
　驚愕したのは彼だけではない。広場の端で見ていたシュリもだった。
「ア、アイツ……どうすんだ、これ。おおい！」
　気がついたときには、リュートを抱きかかえたまま走りだしていた。



　特務支援課を振り切るだけのことはある。
　彼は柵を跳び越え、道なき道を走り、野を駆ける獣のごとくだ。
　住宅街までやってきた。
「フッ……ここまで来れば……」
「はぁ、はぁ、はぁ……ようやく、追いついたぜ！」
「アレッ!?　君は、さっき港にいた子じゃないか」
「アンタなぁ……これ！」
　シュリはリュートを突き返す。
　オリビエが唖然となった。
「もしかして、これをボクに渡すために追いかけてきてくれたのかい？」
「アンタが急にいなくなるからだ。大切な物なんだろ」
「……信じられる人物だと思ったから預けたのだが……まさか、ここまで追いかけてきてくれるとは」
「オレは……絶対に盗みとか、しない」
　シュリは拳を握った。
　オリビエが黄金の髪をかきあげる。
「感動したよ。そんなにも……ボクの演奏を聞きたかったなんて！　走って追いかけてきてくれるなんて。ボクの歌のために」
「はぁ!?」
「さぁ、今こそ君の期待に応えようじゃないか」
「いや、べつにいいって。よく考えたら、警察官がいたんだから渡せばよかった……あっ、そういや……ど、どうして、ロイドたちに追われてるんだ!?」
　突然いろいろなことが起こりすぎて、考えが足りていなかった。
　シュリは後ずさりする。
「アンタ、犯罪者なのか？」

「フッ……友人が警察に依頼してまでボクを捜しているのさ。彼の心配性も相変わらずだよ。この程度の時を別々に過ごしたところで、ボクらの愛は薄れはしないのに」

「友だちなのに愛……？　よくわかんねえ。アンタ、嘘ついてないだろうな」

「ボクは清廉潔白さっ。それでは、熱烈なファンのリクエストに応えて演奏を…………むっ⁉」

突然、オリビエが表情をこわばらせた。

びくっ、とシュリは身を固くする。

「な、なんだ⁉」

「君！　その服は⁉」

「はぁ？　オレの服……どうかしたか？　べつに似合ってるとは思ってねえから放っとけ」

「そんなわけにはいかない。だいぶ汚れてしまってるじゃないか。このほつれも、さっきはなかったはず」

言われてみると——

鉄柵を乗り越えたり、草木の間を走ったりしたせいか、シュリの服には汚れや破れがあった。

「ああ……まぁ、このくらいなら直せるだろ」

昔は日常茶飯事だった。

ところが、恐いくらいオリビエが迫ってくる。

「ダメだ。そんなことはボクが許さない」

「な、なんだよ……ひとの格好にダメ出しする気か？　アンタにだけは言われたくないぞ」

「お詫びに服をプレゼントさせてくれたまえ！　なに、時間は取らせないよ。いい店があると聞いてるからね」

「え？　いいって。これくらい、オレは気にしないから」

「それではボクの気持ちが収まらない。この情熱を歌にすれば伝わるだろうか⁉」

「やめろ……まぁ、くれるっていうなら、いいかな。どうせ暇だし」

こんな住宅街の真ん中で演奏会をはじめられるよりはマシだと思った。

ふたりして歓楽街へ向かう。



シュリは不安になった。

「服を買うんだろ？　中央広場の百貨店（タイムズ）とかじゃないのか？」

「クロスベルで女性へ衣服や装飾品をプレゼントするなら、ミシュラムか、この辺りだと聞いたんだ」

「そ、そうしょくひんだ……と？」

連れて来られたのは、高級ホテルにある高級ブティックだった。どのくらい高級かというと高級すぎてシュリにはよ

くわからない。

光っているかのように艶のあるドレスや、見たこともない宝石が売っている。

「ん？　このイヤリング……前にイリアさんが付けてたのに似てるな……ファンからの贈り物って言ってたけど……」

値札に視線を落とす。

ゼロがいっぱい付いていた。

「うげっ⁉」

「それが気に入ったのかい？　よかったら、ボクが」

「ば、ばか言うな。家が買えるぞ⁉」

「さすがに、それは無理だと思うけど……しかし、君には、もっと明るい雰囲気のほうが似合いそうだね。よし、これがいいかな。ああ、帽子も悪くない」

「おいおい……なに買う気だ？」

「いいから任せておきたまえ。これでも女性のエスコートには慣れているんだ。みんな笑顔になってくれる」

「それ、苦笑いだぞ、きっと」

「ふむ……ドレスは、これがいいか」

「オレになにを着せる気だ⁉　か、帰る！」

「なんだって⁉　それは本気かい？　やっぱり、ボクの情熱を伝えるには歌しかないってことだね」

「ぐっ……」

これを放置して逃げるなんて、とても店に迷惑になるだろう。

そんなことはできない。

まだシュリの顔は、街の人たちに広まっていないが、アルカンシェル劇団の一員として自覚を持って行動するように、と団長から常々言われている。

「あ、あまり派手なのは嫌だからなっ」

「わかっているとも！　ボクは謙虚さを心得たジェントルメ～ンだからねっ」

胸に手を当てたオリビエが、雪のように白くて金銀があしらわれた端々に宝石の光るコートをひるがえした。

説得力がない。

そして、シュリの予想は半ば当たってしまう。

着せられた服は、上等なドレスだった。

白くてひらひらしたワンピースで、肩にもフリルがついている。腰を布でしばり、後ろで大きなリボンにしていた。

水色のアームカバーと、同色のハイヒールは、銀の刺繍と紅玉で飾られている。

シュリは背中に、じっとりと汗をかいてしまった。

アルカンシェル劇場を訪れる貴婦人たちが、こうしたドレスを着てくるのは見ている。

しかし、自分がこんなものを着ることになるとは想像すら

したことがなかった。
「な、なんだよ、この服……ひらひらしてて……踊るのか？　靴も細すぎるし……なんでカカトが高いんだ？」
「歩きにくいかい？」
「べつに。バランスのトレーニングにもならねえけど」
「ほぅ……」
すこし歩いただけで、オリビエが感嘆をこぼした。
離れて見ていた店員たちも、うっとりと見とれている。
シュリはドレスの裾をつまんだ。
さわり心地が違う。
「なぁ、オレには、こんなの似合わないだろ？」
「まさか。とても似合っているよ。このドレスが君より相応しい者などいるはずがない。女神（エイドス）とボクの真心に誓って」
「アンタの真心はどうにも信用できないけど……それにしたって、高いんじゃないのか？」
「もちろん、高級品だとも。そして、もう支払ってしまったから、君が着てくれないと困ったことになる」
「もう買ったのかよ!?」
「袖を通すなら、支払いを済ませておかないとね」
「こ、高級品って……そうなのか。試着とかないのかよ」
店員が困惑したような顔をしている。
これ以上もめていると、店に迷惑をかけてしまいそうだ。
シュリは観念した。
店に入ったのが、そもそもの敗因だったか。
「はぁ～……もう買っちゃったなら貰っておくけど……ただ、リュートを届けたくらいでコレじゃ、不釣り合いだろ。オレにできることはあるか？　あ、4時から練習があるから、それまでだけど」
店の時計を見ると、残り2時間といったところだった。
オリビエが嬉しそうに。
「それでは、ぜひとも街を案内してくれたまえ。ボクも明日には忙しくなる身でね。今日のうちに、クロスベルを存分に堪能しておきたいんだ」
「ああ、わかった」
「そうそう……これも」
シュリは頭に、大きなリボンの結ばれた白い帽子がかぶせられる。
姿見に映った自分に、思わず顔を赤らめた。
「だ、だれだ、コイツ……ぜったいオレじゃねえ」
「うん、とても綺麗だ」
「黙れって」
「さぁ、行こうか」
店員たちの声を背に受けながら、シュリはオリビエと一緒に街へと出た。





「すこし遅くなったが、お昼を食べようじゃないか」
「オレ、そんなすごい店とか知らねえぞ」
「君がいつも食べているものがいい」
「いつも？　それなら、美味しいラーメン屋台が……待てよ……この格好だとヤバイな。飛ぶもんな、汁が」
「ボクは気にしないけど」
「無理だ。ハンバーガー……ピザ……あっ、西通りのほうに美味いパン屋があったな。ランチもやってるはずだから、そこにしようぜ」
シュリたちは西通りで昼食を取った。
オリビエは喜んでくれたが、シュリのほうは周りからの視線が気になってしまい、あまり味がわからなかった。
落ち着かない。
その後、中央広場に出て大道芸を眺める。
ひょうきんなピエロのお手玉に、オリビエが飛び入り参加して真似をしはじめた。
五つの玉を右手で上げて、左手で受けて、まるで輪のように回していく。
最初は調子よかったが、手元が狂ったらしく、放り上げた玉が全部、彼の頭のうえに落ちてきた。
ぷっ、とシュリはふきだす。
「あははは……なにやってんだよ」
「フフ……いや～、意外と難しいものだね。見てるぶんには簡単そうなのに」
「そりゃそうだ。ぷはは……ぜんぶ、頭に当たるとか……ぷはは、むしろ、そのほうが難しいんじゃないか？」
オリビエが穏やかに微笑む。
「やっと、笑ってくれたね」
「え？」
「うん。ボクが思ったとおり、君は笑顔がよく似合う」
「な、なに言ってんだよ！　ばかじゃねえのか⁉」
シュリの顔が熱くなってくる。
オリビエが颯爽とリュートを構えた。
「この感動を歌にして、広場にいる全ての人に届けよう！」
「や・め・ろ！」
逃げるようにシュリは歩きだす。
ララ～、と歌いかけた彼が、あわててついてきた。
「どうしたんだい？　演奏はこれからだよ？　あっ、場所を変えるのかな。ふたりきりの演奏会がいいなんて、ふふ……欲張りさんめ」
「黙れ。蹴飛ばすぞ」

睨みつける。
ハイヒールを穿いても頭ひとつぶん以上の差があるので、ぐっと見上げる感じになった。
オリビエはニコニコと笑顔だ。
「……アンタ、本当に楽しそうだな」
「もちろんだとも。ミュラーに管理される生活も愛が感じられて幸せだが、クロスベルは珍しいものが多い。なにより、君といると飽きないからね」
「なんだそれ……意味わかんねえ」
「君は楽しくないのかい？」
「どうかな。昔に比べたら……今は最高に幸せだよ。食べる物にも、寝る場所にも困ってないし、病気になったときに看病してくれる人もいる。打ち込める目標もある。だから……なくしたくないと思うから……がんばってるんだけど」
「それは〝楽しむ〟というのとは違うね。〝大切にする〟というのは、また別のことだ」
「……そうだな。イリ……えっと……いろいろと教えてくれてる人からも〝楽しむことが一番〟って言われてるんだけどさ。アンタみたいには、できないよ」
「ボクは天才演奏家だからねっ」
「はっきり言って、アンタ、そんなに上手くないじゃん。それなのに、どうして、そんなに楽しそうなんだ？」
オリビエが固まってしまう。
やがて格好つけて笑いはじめた。
「………フッ……天才とは理解されない宿命を背負っているのだな……フフフ……悲運の天才演奏家。いいぞ、それはそれでいい感じだ」
「な、なんか、すごく嬉しそうだけど、褒めてないからな？にやにやすんなよ、気持ち悪い」
「フフ……この罵倒。そして、後世に高く評価され、理解されなかった悲運に人々は涙するのか。素晴らしいぢゃないか！」
オリビエが一回転して、ウィンクをかました。
キラキラと輝く。
がっくり、とシュリは肩を落とした。
「ごめん……謝るから、その変に嬉しそうな顔はやてめくれ」
「もっと蔑んでくれたまえ。さあ！」
「いや、もういい。本当……オレも……アンタみたいな性格だったらな」
「今度は憧れの的かい？」
「ちょっと違うけどさ。プレッシャーとか感じたことないだろ？」
「プレッシャーか。そうだな……帝国、共和国、リベール、レミフェリアの代表が一堂に集まり、軍事経済について会談

するのは、さすがに笑ってもいられないかな」

「な、なんの話だ？」

「フッ……ものの例えだよ」

「ふぅん？」

「高い視点で大局を見れば、たいていのことは些事にすぎない。このボクたちの人生さえも、巨大な星から見れば、ささいなことじゃないか」

「オレは星じゃねえから、よくわかんないけど」

「そうだな。ボクも星じゃなかった。それでは……」

「まぁ、なんとなく言いたいとこはわかったよ。たぶんな」

シュリのぶっきらぼうな言葉に、オリビエが目を細めて、うなずいた。

「君の役に立てたなら、嬉しいよ」

「あ、うん……ありがとう」

「ん？」

「なんでもねえよ！」

シュリは自分でもよくわからない理由で顔を隠すように、白い帽子のつばを引いた。うつむく。

「もう、時間がなくなるぞ。他のとこを見ようぜ」

「どこへ行こうか？」

「……そうだな……東にするか」



東通りで、シュリたちは屋台などを見て回った。

それほど珍しくないだろうと思ったが、オリビエにとっては新鮮だったらしい。

そろそろ劇場に戻ろうかという頃――

肩がぶつかった、と言いがかりをつけられた。

オリビエがシュリをかばうように立つ。

「大丈夫だよ」

「お、おい……」

絡んできた相手を見て、シュリは緊張を高めた。

（こいつら、《サーベルバイパー》じゃないか。最近、荒れてるって噂だったけど……こんな昼間から、東通りで絡んでくるなんて）

顔見知りはいないが、昔は宿無しの生活をしていたため、それなりに詳しい。

彼らは旧市街を根城にしている不良グループだった。最近、リーダーに何かあったらしく、統制が取れていない。

ケンカが増えているとは聞いていたが……

街の人々は恐がって見ているだけだ。

当然だろう。

サーベルバイパーといえば、地元で知らぬ者がいないほどの荒くれだ。

威圧的な格好の若者が詰め寄ってくる。全部で四人ほど。

「オイオイ、肩が折れたぞ、どうしてくれんだ!?」

「テメェ、慰謝料、置いてくか!?」

「いいコートじゃねえか。そいつを置いてってもいいぜ？」

「へへへ」

シュリは考える――どうやら金持ちだと思って絡まれたらしい。こんな目立つ格好してたら、こういうこともあるか。

走って逃げるか？　警察官より速い自分とオリビエならば……いいや、ダメだ。このドレスとハイヒールでは、それほど速く走れない。

大声をあげるか？　周りの人たちが助けてくれるかもしれない。けれど、助けてもらえなかったら？　相手を怒らせるだけになってしまう。

どうする？

どうすれば？

シュリは、オリビエの横顔を見上げる。

彼は笑っていた。

もしかして、この状況すら楽しんでいるのか!?

「なぁ……アンタって、もしかして、すごく強かったりするのか？」

「ボクが？　それは…………いや……ぜんぜん。ケンカなんてしたこともないのがボクの自慢さ」

「そ、それじゃ、どうして笑ってんだよ!?」

「得難い経験だからね。これぞ人生の醍醐味じゃないか。この感動を――」

「歌ってる場合じゃないって！」

不良連中が、手を伸ばしてくる。

「なに、ごちゃごちゃ言ってやがんだ!?　さっさと、出すもん出せって!!」

「フッ……お断りさせてもらおう」

「なんだと、テメェ!?　痛い目に遭いたいのか!?」

「争いはなにも生み出さない。愚かな憎しみの連鎖を紡ぐだけさ。そんな君たちに歌を贈ろう。混沌とした心を解きほぐし、やがて人々を結びつけるような、そんな優しくも切ない歌を……」

「オリビエ、危ない！」

シュリは彼の腕を引っぱる。

ぎりぎりで、不良の振るった拳が、彼の鼻先を通過した。

空気を切る音がする。

「うわっ、かすったよ!?」

「次は顔面を殴られちゃうぞ!?　オリビエ、もう逃げるしかない！　走れ!!」

「よし、君だけ行ってくれ。ここは、ボクが引き受けよう」

「なに言ってんだ⁉　ケンカしたこともないくせに」

「フッ……仕方ないさ。ボクが本気を出すと、戦争になってしまうからね」

こんなときまで、なにを言ってるのか意味がわからない。

（だ、誰か……誰か助けて‼）

シュリは目頭が熱くなった。

声がする。

「そこまでだ！」

駆けてくる足音。周りの人たちが、さっと道を開けた。

ブラウンの髪の青年が、武器を手にして走ってくる。

「――なにをしているんだ、お前たち‼」

サーベルバイパーの連中が、あわてて後ずさった。

「ぐっ……オマエらは……⁉」

「特務支援課か！」

「オイ、ワジの野郎もいるぞ⁉」

「くそっ！　やっちまえ！」

勢いのついた不良たちが、駆けつけたロイドたちに突っこんでいく。

ロイドが身構えて。

「仕方ない……市民に被害が出る前に、制圧する！」

「わかったわ」

エリィが銃を構えた。

ランディが巨大なスタンハルバードを振り回す。

「しょうがねえなぁ。でかい怪我をさせないようにするほうが面倒だってのに」

ワジが肩をすくめた。

「やれやれだね……僕にも責任がないとは言えないけど」

「関係ないと思う！　これはワジくんのせいじゃないでしょ」

ノエルが断言した。

なにがあったかシュリは知らないが、この件に関しては、絡んできた不良たちが悪いのは間違いなかった。

怒声をあげるサーベルバイパーの連中を、ロイドたちが迎え撃つ。

大騒ぎになってしまった。

すっ、とオリビエが後ずさる。

「ここは任せても大丈夫そうだね」

「あ、そういや……アンタ、警察に追われてるんだったな」

「その言い方は、ちょっと誤解を招きそうなんだが。まぁ、その通りだよ……愛の逃避行といったところさ」

「な、なに言ってんだ⁉」

「そして、このあたりが潮時のようだ。とっても名残惜しいけれどね」

「え？　あ……」

もうすぐ4時になる。劇団の練習が始まってしまう。

オリビエが寂しそうな顔をした。

「この偶然の出会いと、一緒に過ごせた幸せな時と、切ない別れ、全てが愛おしくボクの心に生涯残るだろう」

「そんなこと言って……どうせオレのことなんて明日には忘れてるだろ」

オリビエが手を差し伸べ、頬に触れてくる。

「――覚えているさ。そして、また出会う」

「うそつけ。オリビエは外国の人じゃないか」

「本当さ。君の未来は間違いなく輝きに満ちている。なぜなら……」

「なぜなら？」

「この天才演奏家オリビエ・レンハイムのリサイタルを聞くことができたのだから‼」

はぁ～……とシュリは溜息をついた。

あれ？　とオリビエが首を傾げる。

「どうしたんだい？」

「もう、いいから行けって。そろそろ、あっちも終わるみたいだぞ」

「フッ……そうするよ。また会おう（アディオス）、親友（アミーゴ）‼」

暴れたサーベルバイパーの連中は、すっかり大人しくなったようだ。エリィとノエルがキツ～くお説教している。

ロイドがやってきた。

「大丈夫ですか、お嬢さん」

「えっ⁉」

気付いてない？

いつもの気安い感じではなく、ロイドが妙にかしこまった雰囲気だった。

どうやら、シュリだとわかっていないようだ。

服と帽子だけで……そう思うと、なにやら腹立たしい気持ちになってくる。

「本当に鈍感なんだな」

「え？」

「べつに」

「あの、どちらに行かれる予定ですか？　よかったら、送っていきます」

「アルカンシェル劇場へ、4時までに」

「そうですか。ちょっと急いだほうがいいですね」

「なぁ……本当の本当にわからないのか？」

シュリは詰め寄る。

ロイドが慌てはじめた。

「な、なにを……？」

彼の背後にいるワジが苦笑する。ランディも、ようやく気付いたらしく目を丸くした。

「マジかよ⁉ おいおい、見違えたぜ」

「やれやれ、一目見てわからないなんて、ちょっと甘いんじゃない？」

ワジの言葉に、ロイドが目をこする。

「ふたりとも知ってる女性(ひと)なのか？ もしかして、俺とも会ってるとか？」

これには、ランディもワジも呆れ顔になった。

「ロイド……おまえなぁ……」

「さすがに鈍感すぎるんじゃない？」

「そ、そう言われても……ん？ いや、そんな、まさか、もしかして……」

ぐっ、とシュリは奥歯を噛んだ。

ハイヒールの先で、ロイドの脛を蹴飛ばす。

「オレだよ！」

「シュリ⁉ 痛ッ⁉」

「ふん……そんなに、オレがドレスを着てたらおかしいか」

「いや、さっき会ったときと……違うから………」

ワジが肩をすくめる。

「男子三日会わざれば刮目して見よと言うけれど、女の子には三時間も必要ないみたいだね」

「そうらしいな。驚いたぜ」

ランディの言葉に、ロイドが首を縦に振った。

「本当に驚いたよ。なにかあったのか、シュリ？」

「なにか……」

ついさっきまでのことを思い出すと、なんだか夢を見ていたような気がして。

どうにも、うまい説明が出てこなかった。

「ふん……教えてやらない。オレは忙しいんだ。またな」

シュリは駆けだした。

ハイヒールだって気にしない。またイリアさんと踊れると思っただけで、まるで翼があるみたいだ。

劇場に戻ったシュリは、そのイリアから、なにがあったのか、そのドレスはどうしたのか、と根負けするまで訊かれ、洗いざらいしゃべらされるのだった。



後日――

もうすぐ幕が開く。

劇が始まる。

シュリは緊張で震えていた。

イリアさんは、いつも通り楽しそうだ。

「うんうん、今日もいっぱいお客さんが入ってるわね。貴賓席まで埋まってると気分がいいわ」

「はぁ……これから新しい演技を見せると思うと、緊張しますね」

不安げなリーシャ姉の言葉を、イリアさんが笑い飛ばす。

「ふふふ……見せてあげたらいいわ。きっと驚いてひっくり返るから」

「そ、そんな」

「シュリ、あんたも黙ってないで何か言いなさい」

「なっ⁉ べ、べつに黙ってたわけじゃなくて、しゃべることがなかっただけだよ」

イリアさんが手招きする。

舞台の横にある小さな窓だった。

「ほら、ここから客席が見えるから。ほらほら」

「いいって」

アルカンシェル劇場『金の太陽、銀の月』のリニューアル版の初公演だ。

お客さんで埋め尽くされて貴賓席まで満員の客席なんて見たら、今以上に緊張してしまうに違いない。

「いいから。見れば落ち着くって」

「そんなのイリアさんだけだよ」

「騙されたと思って」

「ほ、本当かよ」

シュリは疑い半分に思いつつも、小窓から客席を覗いてみる。

まだ照明は落とされてなくて、開幕を待つ人々の顔がよく見えた。

目眩がする。

倒れてしまいそうだ。

けれども、なんだか沸き立つ気持ちもあった。

リーシャが心配そうに声をかけてくる。

「大丈夫？ シュリちゃん、ちょっと恐い顔になっちゃってるけど……」

「え？ いや、なんか、絶対にやってやろう！ って気持ちになったかな」

「そ、そうなの？」

ふっふっふっ……とイリアが不敵に笑う。

「そうよ！ 今日はゼムリア大陸中から大勢のお客さんが来てるわ。各国から取材もね。あたしたちのステージを世界に見せつけてやりましょう」

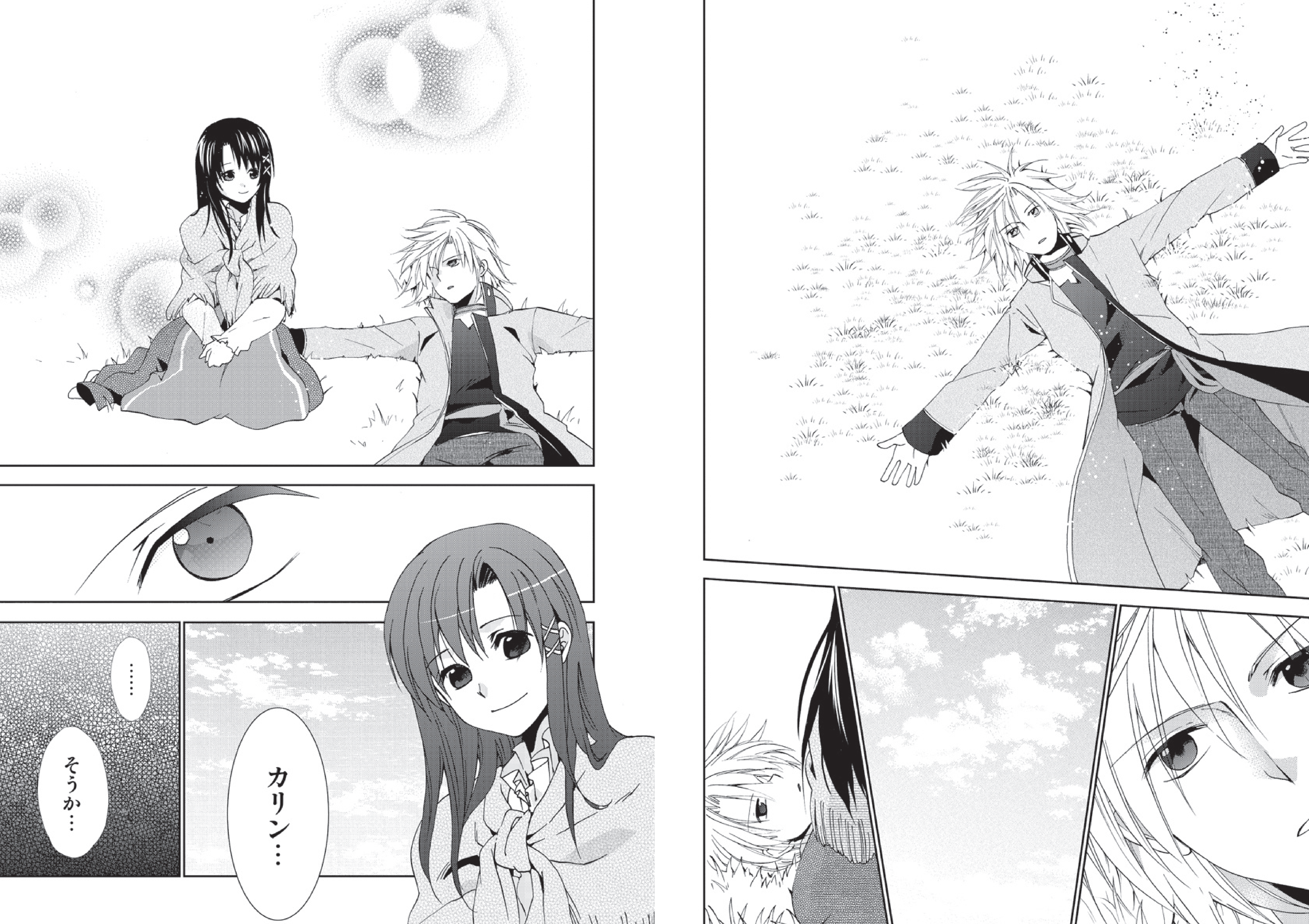
イリアの言葉に、シュリは気持ちを昂ぶらせた。

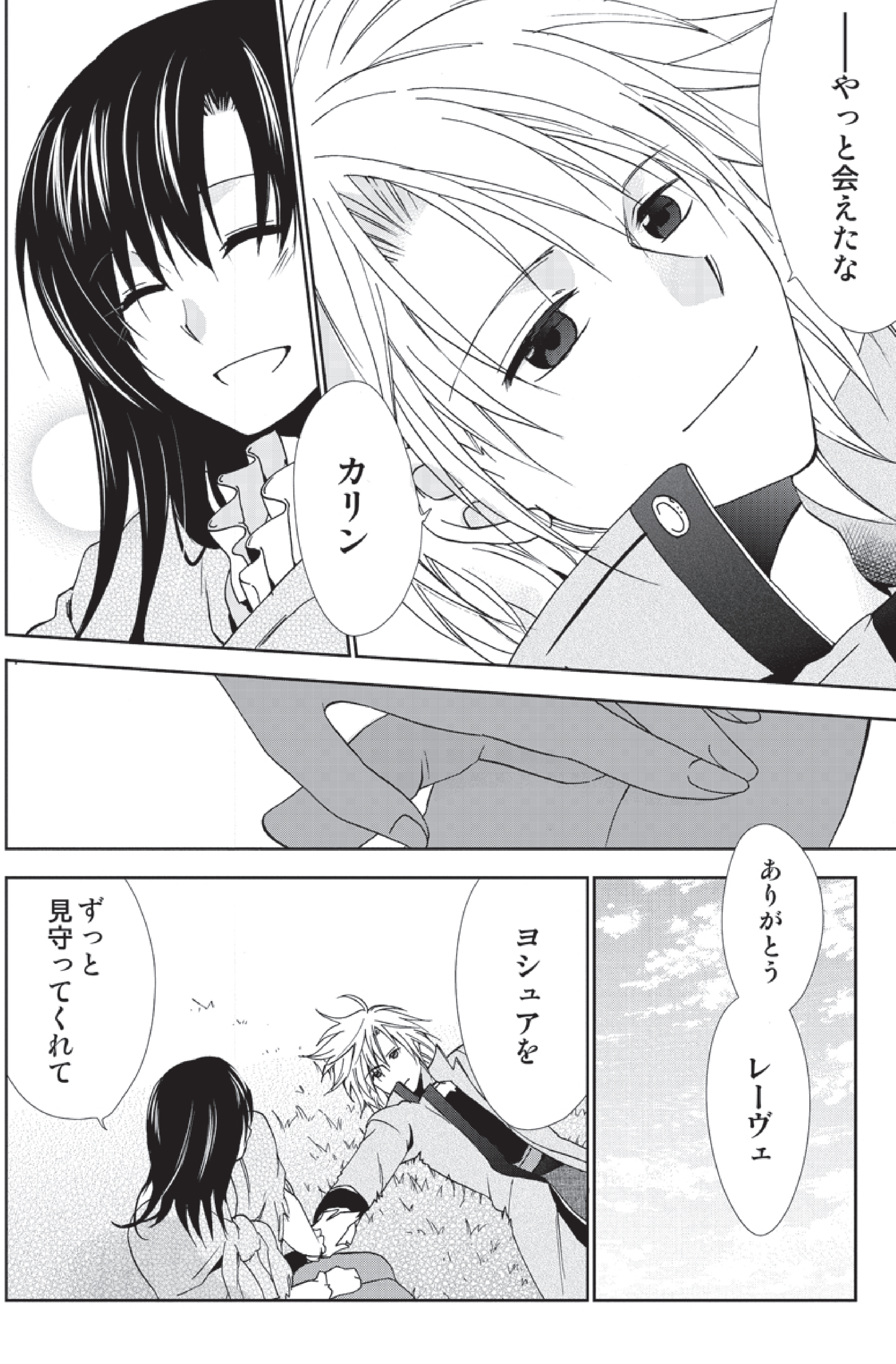
世界か。

自分のことが、外国人であるオリビエの目に入ることもあるのだろうか。
彼には何度も驚かされて、驚かされっぱなしだった。
一度くらい、シュリが驚かせてやらないと。
「……この緊張も……人生の醍醐味か」
ブザーが鳴った。
客席の照明が落ちる。
ざわめきが聞こえてきた。
イリアが歩きはじめる。
「――さあ、いくわよ！」
「がんばりましょう」
リーシャが声をかけてくれた。
うなずいて、ふたりの後にシュリも続く。
「はい！」
シュリ・アトレイドの幕があがった。

第10話　『シュリ・ラプソディー』　了

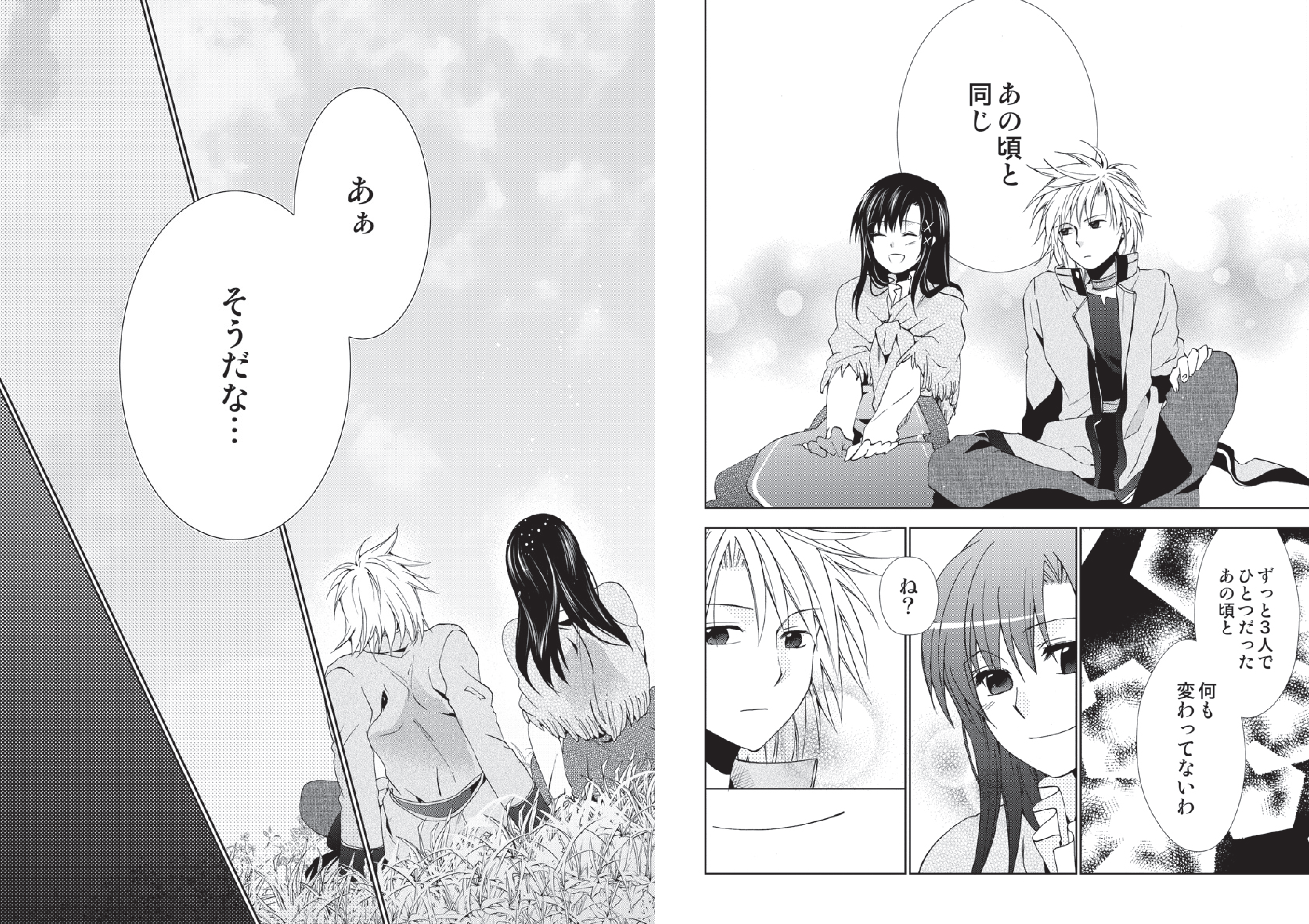

空の軌跡 外伝
レーヴェ物語
最終話
脚本　田沢大典
作画　楽時たらひ
レーヴェ


カリン…
……
そうか…


――やっと会えたな
カリン
ありがとう
レーヴェ
ヨシュアを
ずっと見守ってくれて

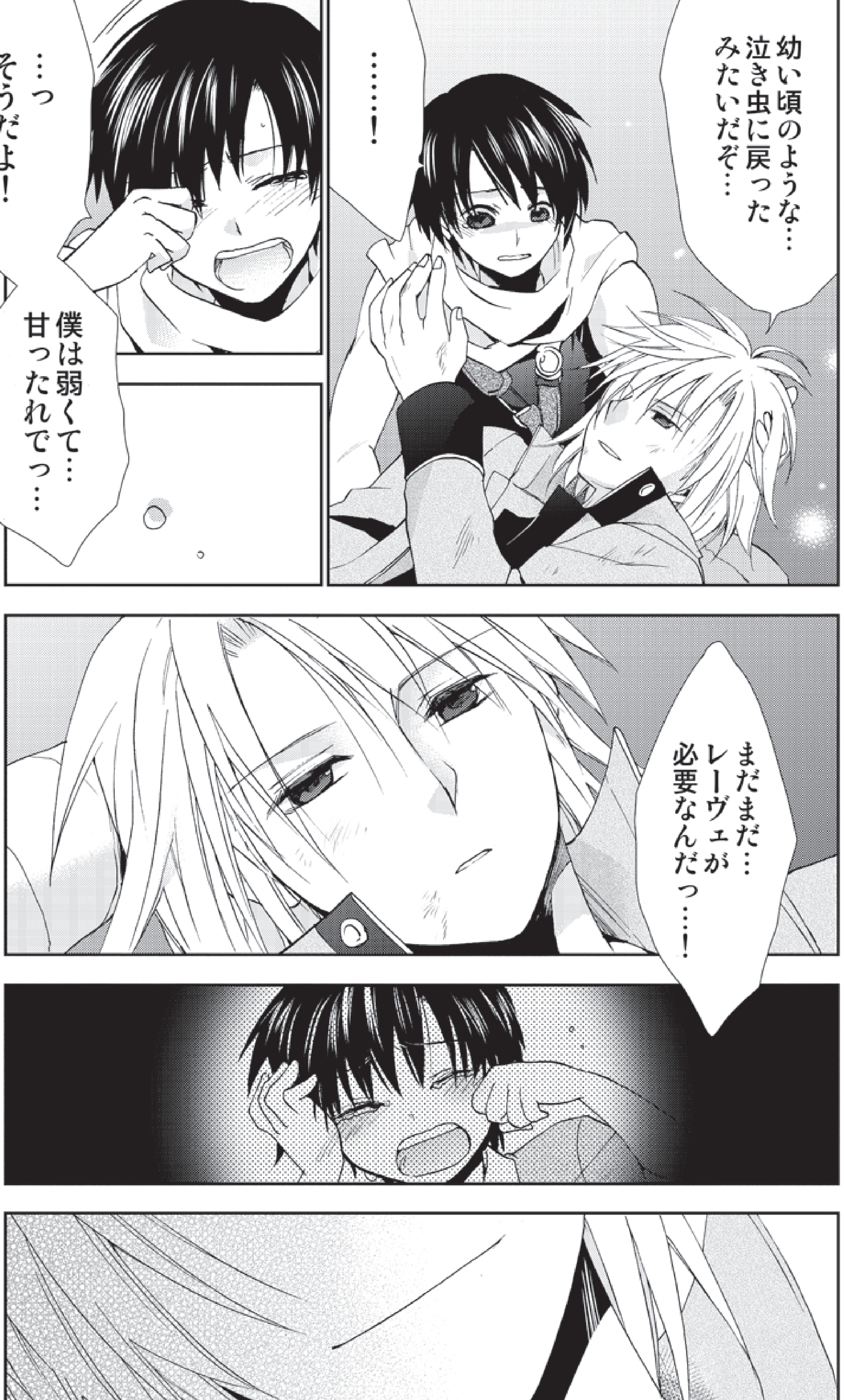

…あなたにだけ
辛い道を歩ませてしまったわね
ごめんなさい…
謝る必要はない
ヨシュアは俺達の弟だ
そうだろう


ふふっ
はは…
……この10年は
長いようで短かったな
世界を恨み
運命を恨み
ただひたすらにカリンの死の意味を考えていた
…その答えは見つかったの?
あぁ
ヨシュア自身が教えてくれた
俺は…あいつの存在に救われ
守られていたんだと思う
…そう
約束したものね
レーヴェは私を守って
私はヨシュアを守って
そしてヨシュアはレーヴェを守るって



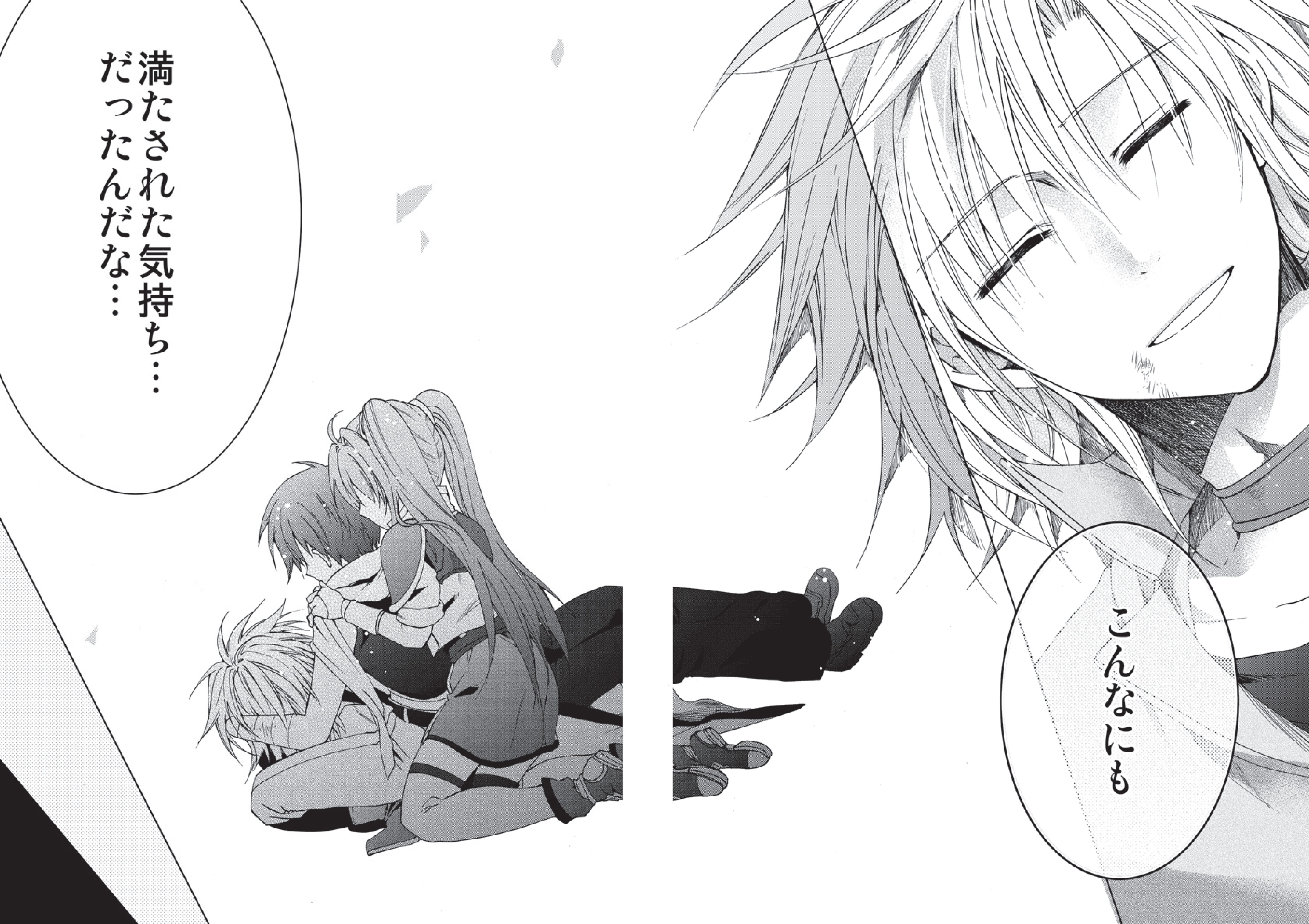
あの頃と
同じ
ずっと3人で
ひとつだった
あの頃と
何も
変わってないわ
ね？
あぁ
そうだな…


レーヴェ
いやだよ
レーヴェまで
姉さん…みたいにっ…
そんな…!
…そんな顔をするな…


幼い頃のような…泣き虫に戻ったみたいだぞ…
……!
…っそうだよ!
僕は弱くて…甘ったれでっ…
まだまだ…レーヴェが必要なんだっ…!


……そんなことはない
むしろ俺がいたのは
お前のお陰だったんだ…
…え…?
……
ヨシュア
生きろ
俺やカリンのように守るために死ぬのではなく…
守るために…生きろ…!
ッ……!!
…エステル・ブライト
これからこいつのことを…
支えてやってくれ…
……うん
約束する……!


…すまない
ああ
こういうことだったんだな
…やっと わかった…
カリン
あの時カリンが
何故 微笑むように 逝ったのか…
俺達の願いはいつだって
ヨシュアの 幸せだった


こんなにも
満たされた気持ち…
だったんだな…

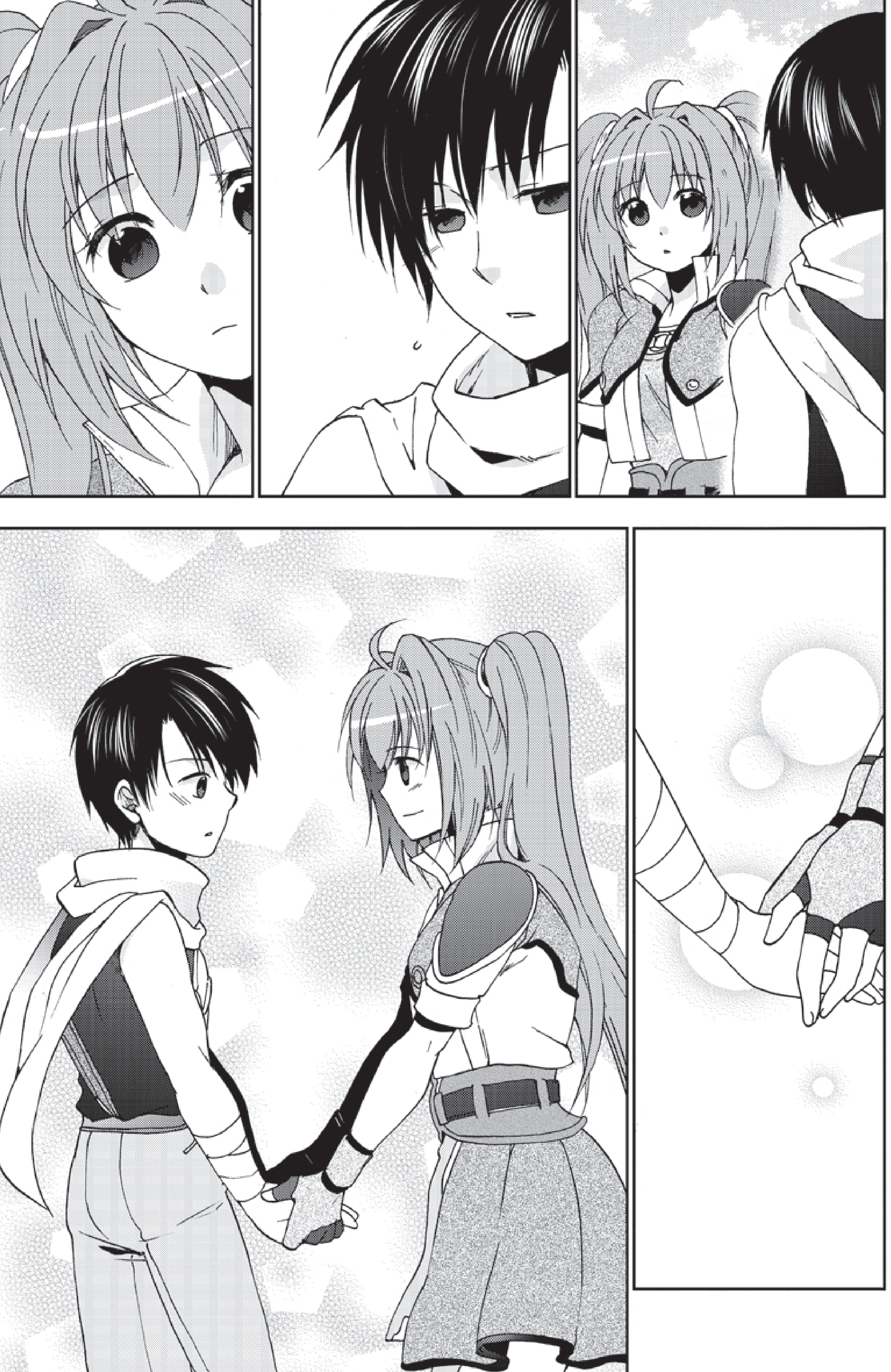


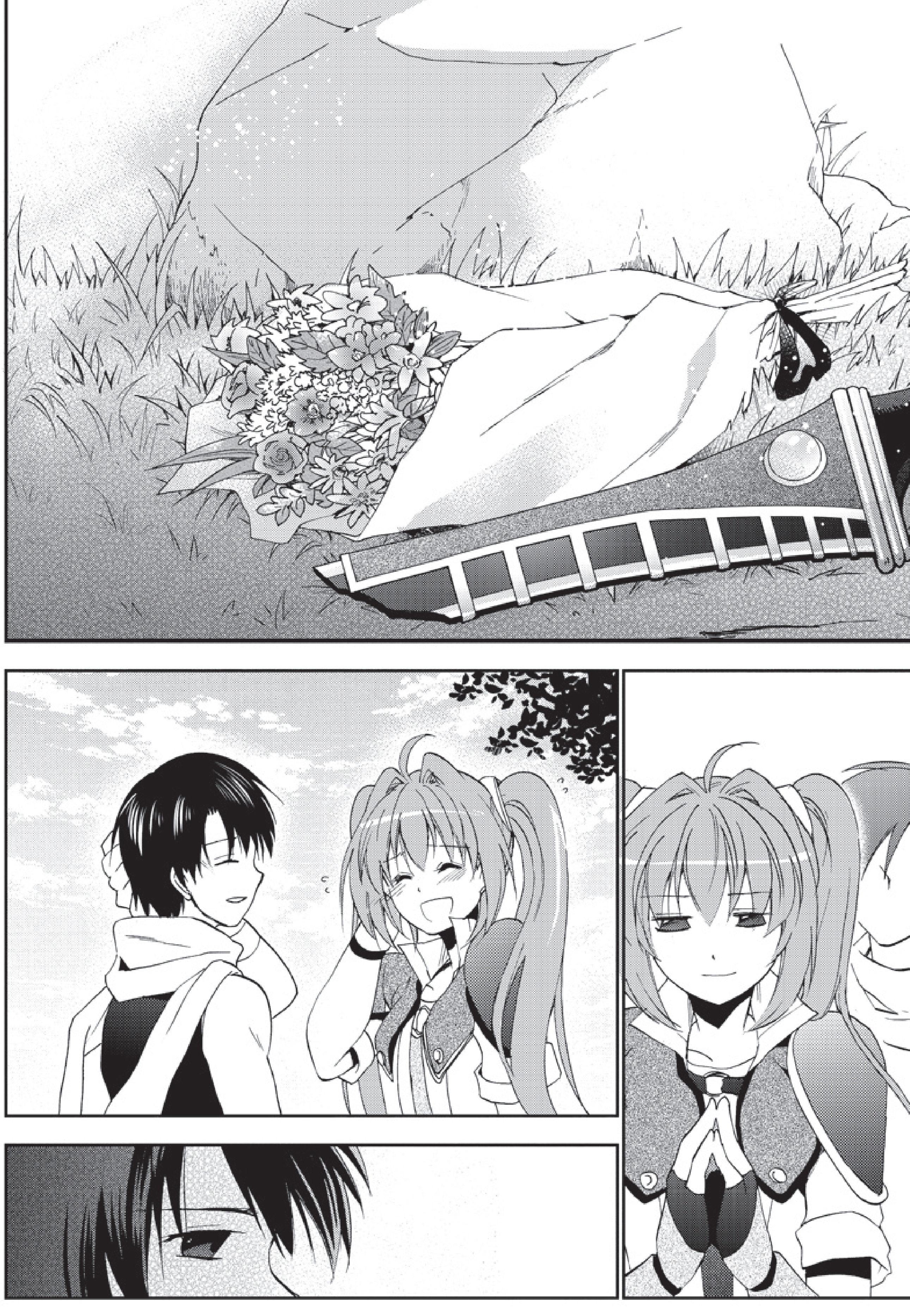

…以上がレーヴェの最期さ

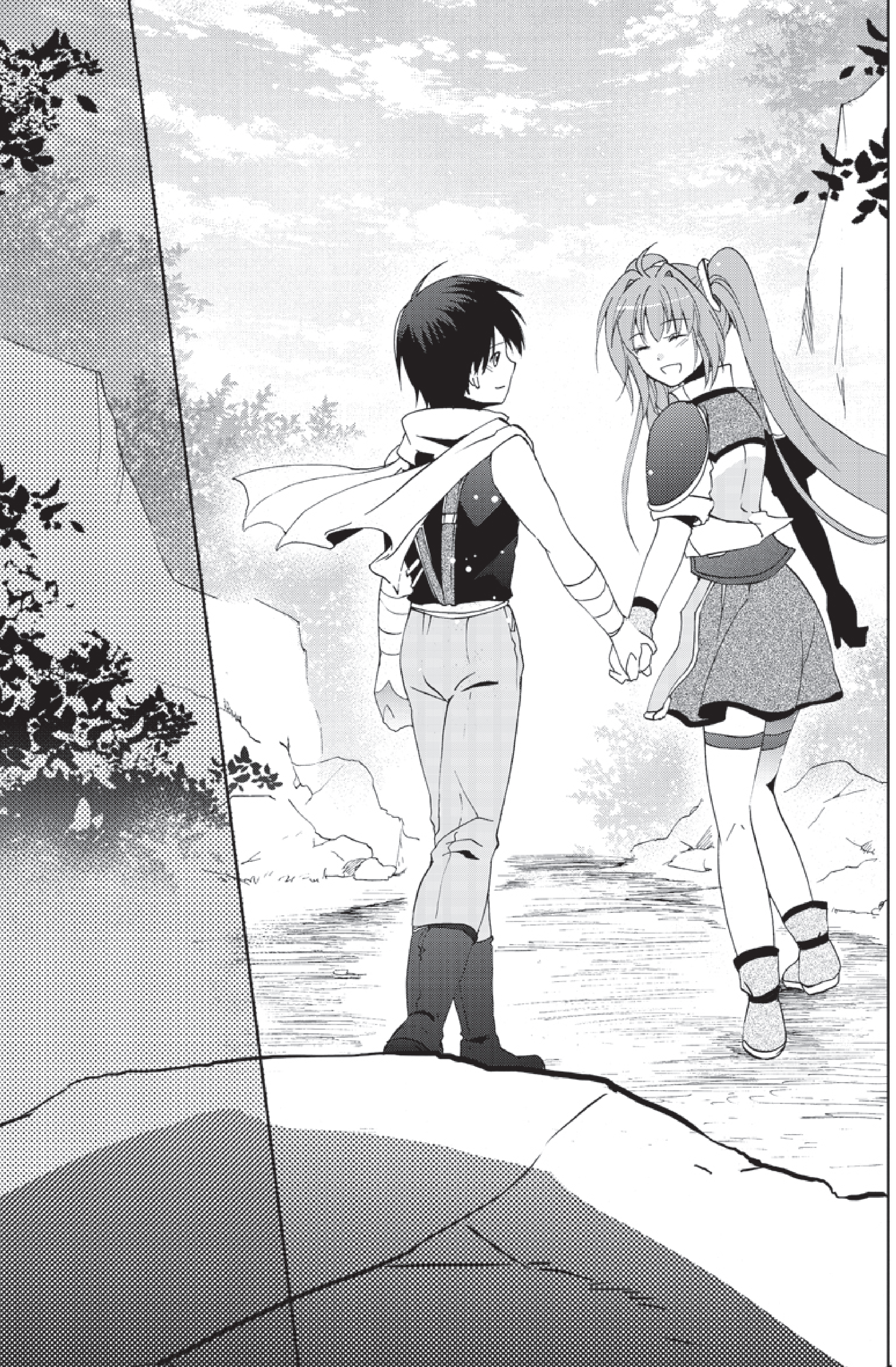

ヨシュアも結社を抜けたよ
レンとルシオラは消息不明…といったところだね
…《剣帝》
《漆黒の牙》《殲滅天使》《幻惑の鈴》…
随分と華が欠けてしまったな…
ふふ…そうだね…
フフフ…
……
チッ


レーヴェの野郎…
やっぱ一度無理矢理にでも一戦交わしときゃよかったぜ
……気に食わねェ
…そう
残念だったね
……さようならレーヴェ
君といるのはなかなか楽しかったよ…？


…盟主
はい
彼は本当によくやってくれました
本当に…惜しい人物を亡くしました
コッ…
《剣帝》レオンハルト
彼の御魂が
安らかにあらんことを…







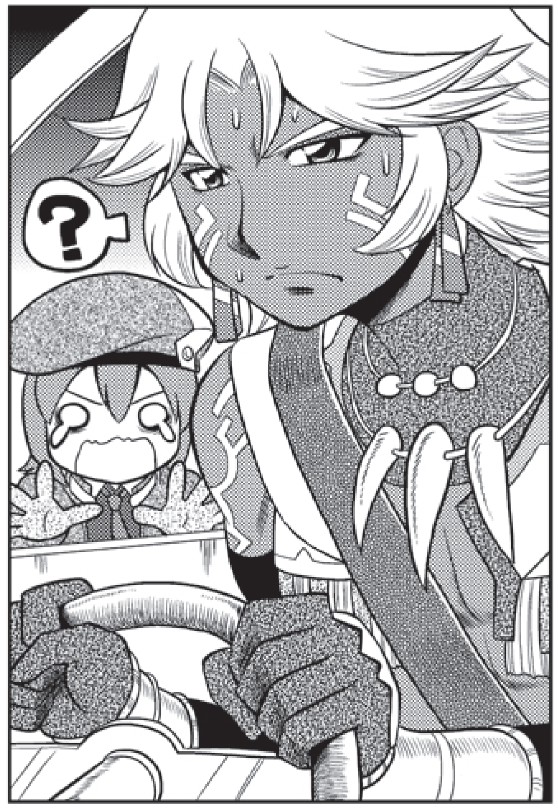






FB ファルコムBOOKS
空の軌跡外伝
レーヴェ物語
作画：楽時たらひ　脚本：田沢大典
『空の軌跡』が始まる──
もうひとつの
原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）
価格：893円（税込）
ISBN:978-489610-224-6
『英雄伝説 空の軌跡』の人気キャラクター・《剣帝》レオンハルトの過去を描くアウターストーリーのコミカライズ。彼はいかにして《身喰らう蛇》に与みし、数奇な運命を辿ったのか。レオンハルトの目線から見たもうひとつの『空の軌跡』の物語が始まる！
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
全国書店にて大好評発売中!!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp

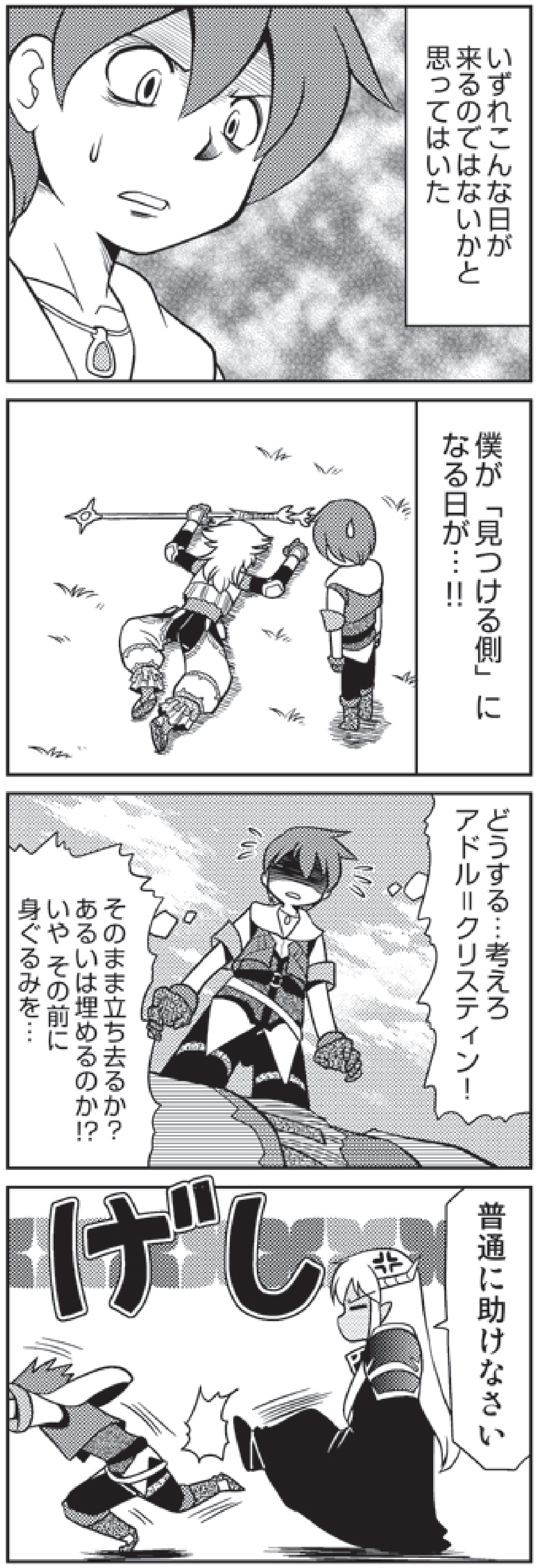

空の軌跡外伝 レーヴェ物語　完



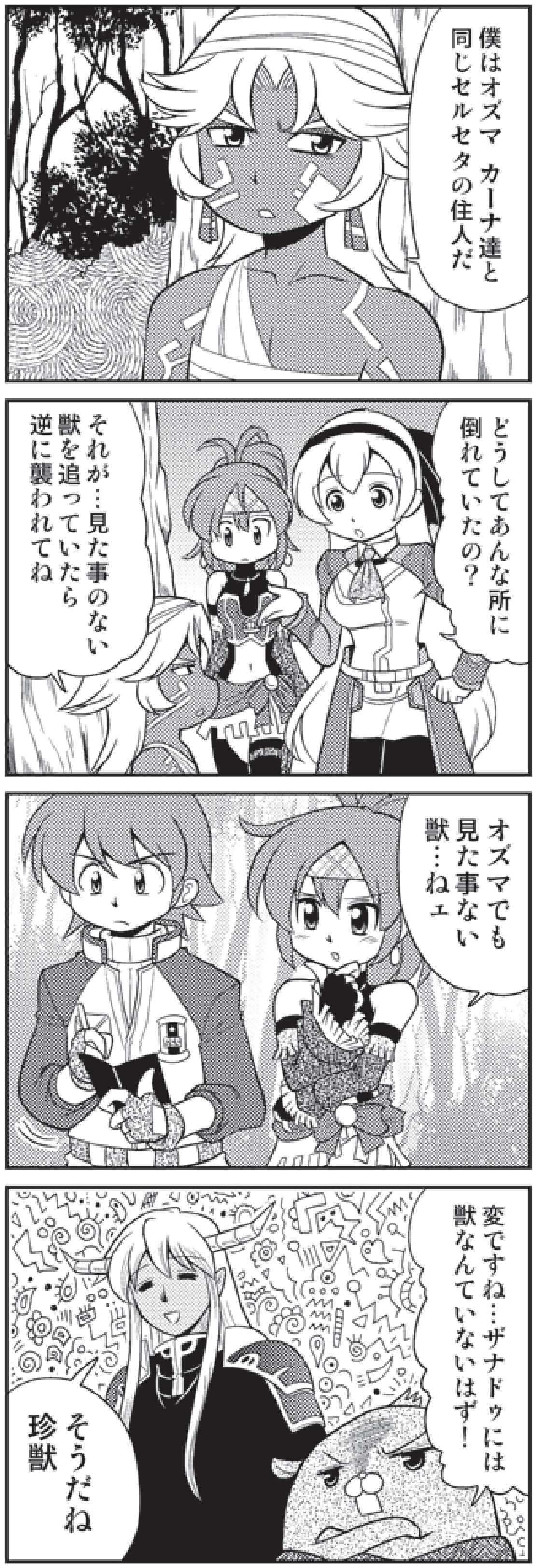
みんな集まれ！ファルコム学園

新久保だいすけ

アドルの初体験



ザナドゥの獣



神狼のプライド



獣マニアたち



全能の獣



獣の正体



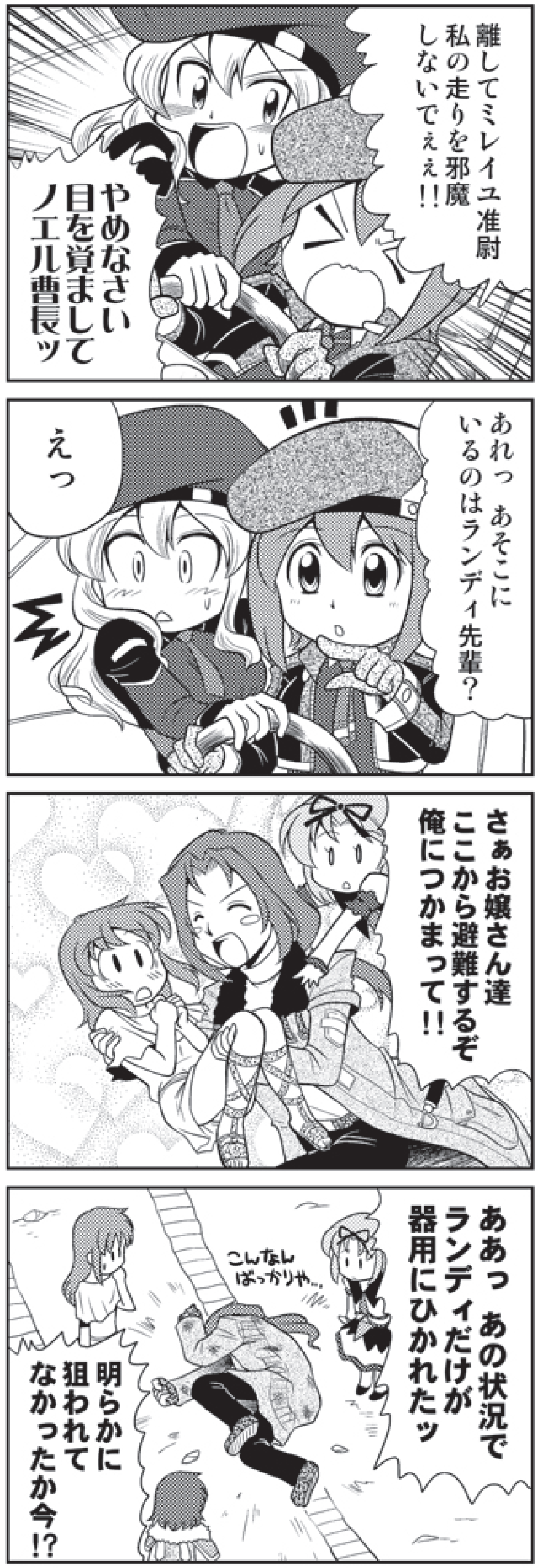
操縦不能



巨獣マニア



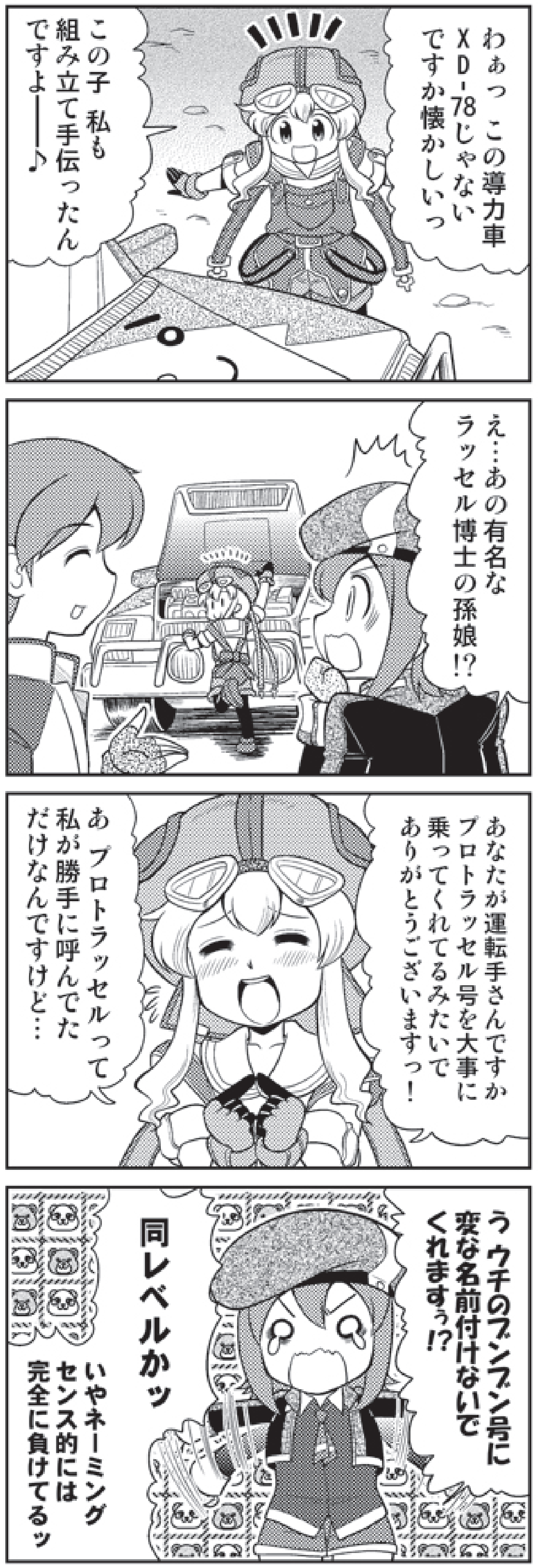
准尉の運転技術



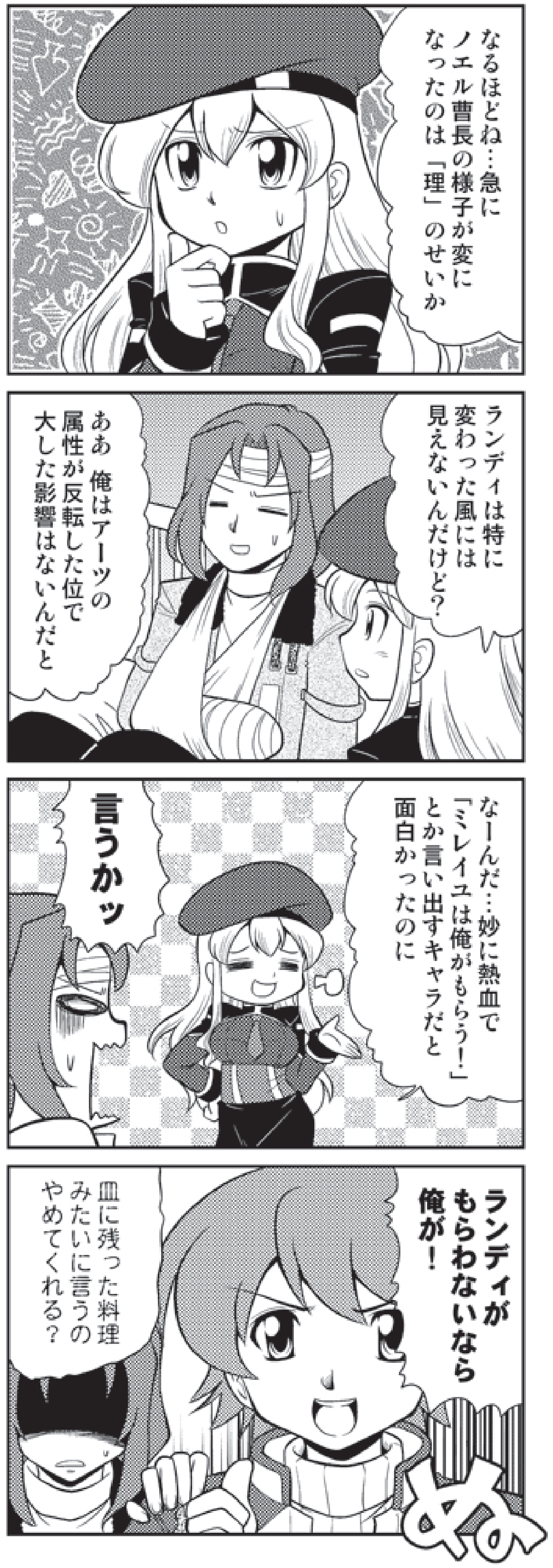
さらばチームガチムチーズ



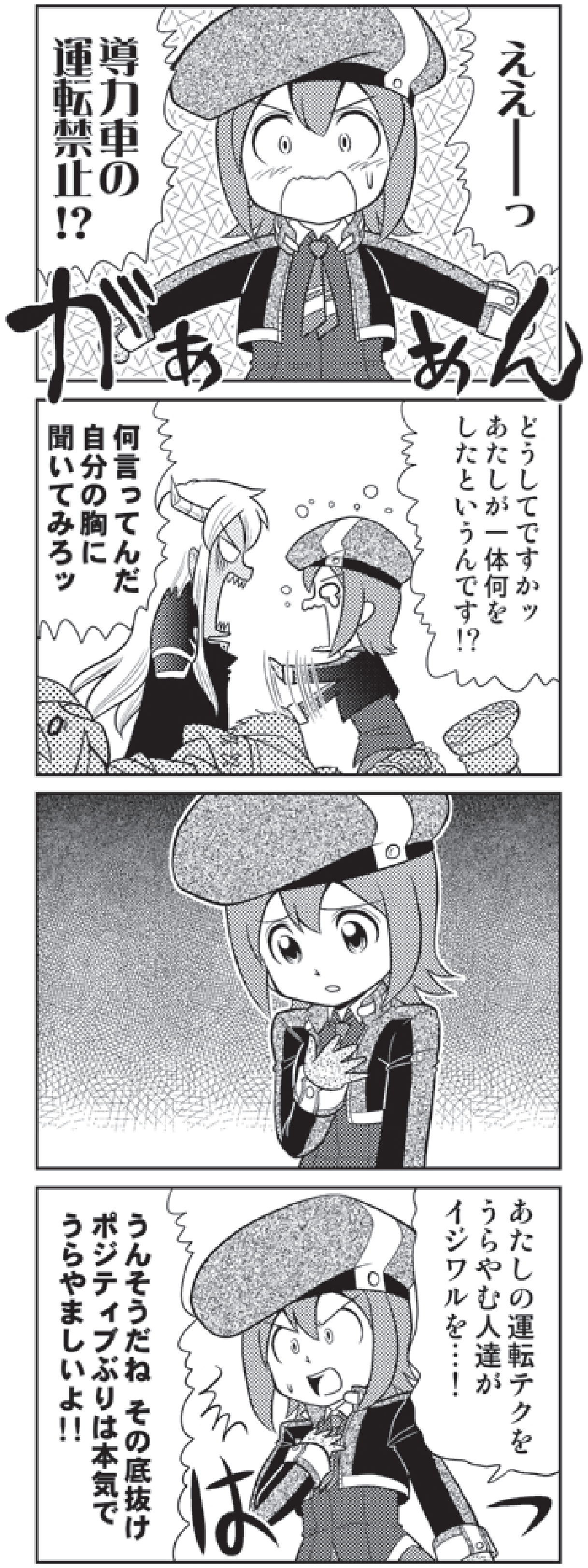
ティータとノエルと導力車



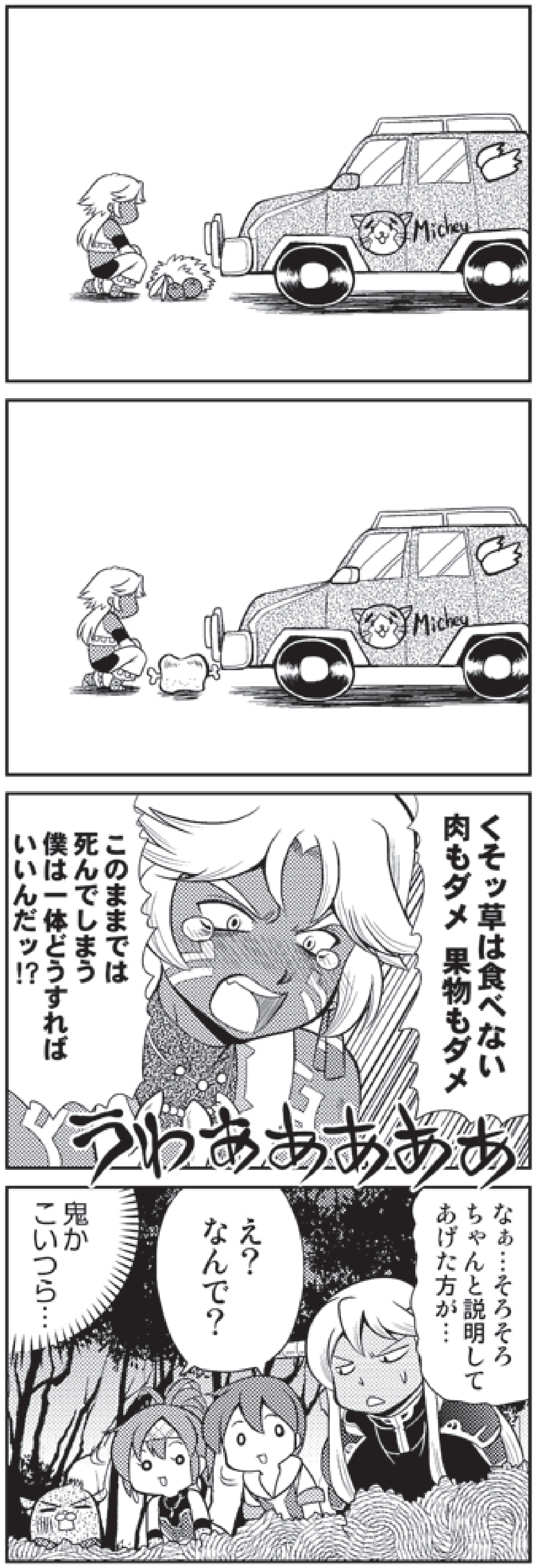
准尉の希望



禁止の理由



ブリーダーの意地



みっしぃとの遭遇



FB ファルコムBOOKS

英雄伝説 零の軌跡
四つの運命
著者:田沢大典　イラスト:松竜



特務支援課はここから始まった!!

日本ファルコムの大ヒットRPG「英雄伝説 零の軌跡」から、ロイドたち特務支援課の過去エピソードを描いたオフィシャルノベライズ。ゲーム本編では語られなかった名シーンの裏側やキャラクターそれぞれの心情が今、明らかになる!

原作:日本ファルコム
(『英雄伝説 空の軌跡』)

価格:1,155円(税込)
ISBN:978-489610-215-4

全国書店にて大好評発売中!!

発行:フィールドワイ
発売:メディアパル

フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp

目指せ!ファルコム一番星!!

FB ファルコムBOOKS

何がどうしてこうなった!?『月刊Falcommagazine』でお馴染み、日本ファルコムの歴代人気キャラクターたちが繰り広げるドタバタ四コマコミックが満を辞して登場。新久保だいすけが描くトンデモな学園生活がスタート!



閉校御礼!



みんな集まれ!
ファルコム学園①
著者:新久保だいすけ

価格:893円(税込)
ISBN:978-489610-245-1

発行:フィールドワイ
発売:メディアパル

フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp

英雄伝説 空の軌跡
～リベール王国スナップショット～

著：はせがわみやび

第7回『ラッセル博士の発明品』

1.

「ああ、惜しいっ」

ドロシーの残念そうな声に、ナイアルは手帳から目を上げた。

窓際の席に座る相棒が唇を噛んでいる。手には愛用のオーバルカメラを持っていた。

「何が惜しいって？」

「ひつじさんです」

「は？」

窓の外を指して言われたがさっぱりわからない。

「もうすこしで羊さんなのに、船が遅すぎて……ああ、形がくずれちゃうぅ。もっと早く廻りこんでぇぇぇ！」

「うるせぇっての！」

ナイアルは手帳を丸めてドロシーの頭をぽかりとやる。

「おおう」

「船の中にいるのは、俺たちだけじゃねーだろっ。少しは控えやがれ。あと、こいつ、いちおう最新型だからな？ これ以上スピードは上がらねえよ」

ナイアルは背もたれを叩きながら言った。

リベール通信社の記者であるナイアルとカメラマンであるドロシーは、ただいま飛行船に乗って王都から工房都市ツァイスへと向かっている。乗っている空飛ぶ船はいちおう王国を就航しているものとしては最新型だと聞いていた。

つまり、これより速い船は王都の軍にしかない。

ドロシーに窓際の席を譲り、ナイアルは次に書くべき記事の資料に目を通し、取材の段取りを考えていたところだった。

相棒のドロシーが奇声をあげるまで。

「ううう。美味しそうでしたのに」

「俺にはつぶれたシュークリームにしか見えねえが」

窓の外に目をやりながら言った。それから気づく。ちょっと待て。いまこいつ、羊に見えたとか言っていなかったか？

感想が美味しそうでいいのか、こら。

「えー？ わかりませんかぁ？ ほらほら」

言いながらカメラの背後に付いている投映板を見せてくる。そこには記憶子に保存される前の撮ったばかりの映像が廃棄されずに映っていた。とりあえずシャッターを押しておくところがドロシーらしい。

雲だった。

つぶれたシュークリームそっくりの。

「どこが羊だ？」

「右に三十度ちょっと回転させると、ほら、ここが足に見えるわけですね。こっちが角。ほらほら、羊っぽいですよぅ」

「回転……って」

「くるっと。頭の中で回せますでしょ？」

「いやさっぱり。のっぺりしてて、そんな凹凸があるようには……」

「ちゃんと影があるから形が予想できますすってば。まあ、たしかに先輩にはこの一枚しか見せてないのですが、窓から覗いてるとですねぇ。ちょっとずつ船が進んでいるから、もっと把握できるわけでして――」

ドロシーが言いたいことと理屈はわかった。

早朝の陽射しが斜めから雲を照らしていて、確かに今は雲の立体感を把握しやすい時刻ではある。

それにしたって、とナイアルは思う。自分には無理だ。

外から見た輪郭と、わずかな凹凸の情報を繋ぎ合わせて被写体の立体的な形を思い描き、それを頭の中で自在に回すことなんて。いったいこいつはどういう脳の構造をしてやがるんだ。天才カメラマンの頭の中をかち割って見てみたい気になる。

まあ噂では、おもちゃ遊びを積み重ねた子は、頭の中でおもちゃをくるくる回転させて、どの方向からでもお絵かきできるのだそうだが――。

ナイアルは昔から平面の上に書かれた活字を追うほうが好きだった。

――第一、そんな芸当ができたら文章で勝負してねえよ。

とも思う。

「あっ！ 先輩、先輩！」

惜しい残念を繰り返していたドロシーが、またわめきだす。
「今度はなんだよ……」
「ほらほら！」
窓の下のほうを指さしている。
ドロシーの身体越しに覗き込むと、大きな街が見えた。北側にある小高い丘の上に、ひときわ大きな、まるでお城のような建物が建っている。
工房都市ツァイスの要――中央工房だ。
「おっ。やっと着いたか！」
「ティーちゃん元気でしょうか」
「どうせ会うことになるさ。それより、今回は温泉に浸かってる暇はねえからな」
「もちろんですよぅ！」
「何故だろう。その台詞を聞いて、俺はいま無性に不安になったんだが」
「センパイってば、心配性ですねー」
――誰がそうさせたんだろうな。
ナイアルはこっそりとため息をついた。

2.

飛行船の到着は定刻通りだった。

昼少し前。太陽が空の頂点へともうすこしで登り詰めようとしている。
ナイアルはドロシーと、船を降りたその足でオーバルエンジンの権威であるラッセル博士の家へと向かった。
アルバート・ラッセル。
『導力革命の父』と称される天才技術者である。
彼の師であるエプスタイン博士が、七耀石から導力エネルギーを取り出すことに成功したのが五十年前のこと。その後、弟子であるアルバート・ラッセルは、導力技術を発展させ、導力によって動く機械――導力器（オーブメント）の数々を世に送り出した。
ラッセル博士がいなければ、導力器の普及には今の倍の時間がかかっていただろう。
専門家たちは口をそろえてこの五十年の導力器の歩みを語った。
その博士も、そろそろ七十に手が届く。資料の写真を見るかぎり、髪はすっかり白くなっていて、年齢相応の顔をしていた。だが、旺盛な発明心は今も衰えることなく、工房都市ツァイスに住み、新たな導力器を産み出し続けていた。
「とてもそんなすごい人には見えなかったんですよねー」
「その言葉、そっくりおまえにも言ってやりたいけどな」
そう返したら、ドロシーはぽかんとした顔をナイアルに向けてきた――相変わらず自覚のないやつだ。

飛行船から見えた中央工房を右手に見て、巨大な、エスカレーターと呼ばれる導力駆動の自動昇降階段を降りる。
そのまま大通りを南へと下った。昼の、人通りの絶えない道をせっせと進む。
居酒屋を右に曲がれば、正面に二階建ての家が見えてきた。
ラッセル工房と呼ばれる博士の家だ。
「さて、家に居てくれればいいが」
扉を叩いたが返事はなかった。
取っ手を回す。かちゃりと軽い手ごたえが返る。鍵は掛かっていなかった。遠慮なく開ける。ラッセル家を一度でも訪れたことのある者なら、みながそうする。そうしろと言われていた。
そうして、そうっと中を窺って、逃げ出す準備をするのだ。
研究に熱中した博士は、呼びかけに返事など返さない。声が返らないから不在とは限らない。そして、もしいるのならば……。
「セ、センパイ……」
ドロシーが怯えたウサギのような声を出した。
低い、振動音が床を伝わってくる。
「やべえ……」
案の定だった。
「くるぞっ！　逃げろ！」
次の瞬間、爆発音があがる。同時に建物が大きく震えた。どす黒い煙がどこかから噴き出してきて、あっという間にナイアルたちの視界を覆った。
「げほっ！　げほっっっ！」
「けっ、けむっ。けむいですよぅ！」
即座に往来へと飛び出したものの、煙を吸ってしまって咳き込んだ。喉がひりひりするし、目が痛い。
振り返ると、二階の窓のひとつが吹っ飛んでいた。瓦礫と化した窓枠が庭に落ちている。黒い煙が建物から吹き上がっていた。
ナイアルは通りの左右を見廻す。あれだけの音がしたのに、通りに誰も飛び出してこないのがすごい。
――馴れっこってことかよ……。呆れてしまう。
アルバート・ラッセル。
リベール王国一の技術者にして天才発明家。
だが、十の発明を産み出すためには、百の失敗が必要だと公言して憚らない。そして研究に熱中した彼は周りが見えなくなることで有名だった。どこかの天才カメラマンのように。
話に聞いていたナイアルだったが、予想以上だった。
振り返ると、扉の向こうから咳き込む声が聞こえてくる。
「けほっ。けほっ、ううむ、パーツがひとつふたつ古かったようじゃな。ティータに頼んであっちから借りてくるかのう

……。新しいパーツさえあれば、出力を十倍にしてもいけるかもしれん。よしよし」

　まるで懲りてなかった……。

「よしよし、じゃねーよ！」

　煙が晴れた。

　視界が見通せるようになって、戸口の先に佇む白衣の老人が見えた。

「む？」

　ナイアルを見て首を傾げる――忘れられたか？

「リベール通信のナイアル・バーンズですよ」

　そう言って、手を差し出した。

「おう。新聞記者か」

　ラッセル博士も握り返してくる。

「ところで君、空いてるなら手を貸してもらえんかの。ちと機械が壊れておってな。修理に必要なパーツがここにはないんじゃよ。その部品というのが……」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。俺たちは別に博士の手伝いに来たわけじゃ……」

「なぬ？　なんじゃ野次馬か。なら用はないぞ。帰ってよし！」

　背中を向けて奥へと立ち去ろうとするものだから、慌ててナイアルは博士の手を掴んだ。内心で叫ぶ。ここで逃がしてなるものか。ったく、とんでもなくマイペースのじいさんだぜ！

　だが、超マイペース人間ならばナイアルだって慣れているのだった。

「用はあります！　こっちがあるんです！　博士の――」

　必死で食い下がる。ナイアルにも記者の意地がある。

「――発明品を世間に紹介したいんです！　ぜひ！」

「わしの発明を？」

「ええ。まあ。『天才発明家アルバート・ラッセルの発明品』というタイトルの記事を書こうと思ってまして。博士の偉大な発明品の数々をぜひ！」

　熱を込めて捲し立てる。

　まったく事件記者の自分がどうしてこんな文化欄の記事を書くはめに、と思いつつだった。これというのも、担当のファルツが温泉村の取材なんぞに飛んでいるからだ……。

　発明、という言葉にラッセルの瞳の色が変わる。

　ナイアルは内心でよしと拳を握った。

　だが、後から考えれば、それが災難の始まりだった気も、する。

3.

「なるほど、わしの発明品を記事にしたいと」

「そうそう」

　ナイアルはこっそり安堵の息を吐いた。どうやら取材の主旨を理解してもらえたらしい。幸先がいいぞ、と思う。

「ないぞ」

「……は？」

　一瞬、何を言われたかわからなかった。

「奥の実験室に仕舞い込んでおいたのじゃがな。入りきらなくなったので引き取ってもらった」

「引き……ど、どこに？」

　尋ねるナイアルに向かってラッセル博士は指を壁のほうに向けた。ナイアルの視線が彼の指先を追って動く。

　部屋の中なのでイマイチ覚束ないが、ラッセルの指さしている方角は自分たちが飛行船から降りた方に思えた。

　そちらにあるものと言えば――。

「中央工房じゃよ。あっちのほうが倉庫がでかいもんでな」

「あー……」

　なんてこった。となると、街をもういちど横断して戻らないといけない。

「センパァイ、わたし、おなかが空きましたー」

　場違いに陽気な声に振り返る。

　戸口に立ったドロシーがひとさし指の先を口の中に突っ込んでいた――子どもか！

「む？　そっちの子は誰じゃ？」

「うちのカメラマンですよ。ドロシー、ほれ」

「あ、はいはい。ええと、わたしはですねえ、ドロシー・ハイアットですよぅ。それでもってこっちがポチ君です！」

　愛用のオーバルカメラを両手でもって前に突き出す。自分よりカメラを強調してどうする、とナイアルとしては言いたい。

「ほう。ぽちくんか」

「はい。いい子ですよぅ。かわいい写真をいっぱい撮ってくれるんです」

「ちょいと見せてもらえるかな」

　はいどうぞ、とドロシーがカメラを渡した。

　小さな導力器でもあるカメラを、ラッセル博士はためつすがめつしながら何度もひっくり返している。こういった小さな導力器も、いわばラッセル博士の発明品の子孫である。己の手が入っていなくても興味があるのだろう。ナイアルと話していたときと比べて別人のように瞳が輝いている。

「なるほど。小さいがよくできておるな。メンテナンスもきちんとされているようじゃし……。おい、ここの計器が示しているのは何じゃ？」

「被写界深度です。こっちが絞りで、こっちがシャッタースピード。オートにもできますけどぉ、わたしはマニュアルが

好きですね。この機種は色々な設定を遊撃士さんたちの使っている導力器のようにここのクオーツをなぞって楽に変更できますし。あ、倍率はこっちです。限度がありますから、望遠やマクロはレンズを取り替えます。カメラはやっぱりレンズですよねっ！」

「ほうほうほう。順調に進歩しとるようじゃな」

「記憶子に蓄えられる写真の数も毎年のように増えてますし」

「うむ」

「でも今は撮った写真が溜まったら、工房に預けて焼いてもらわないといけないんですよねー。記憶子だけを持ち歩けて自分で取り替えられたり、焼き付けられれば、もっと楽になるんですけど」

「できんことはないぞ。そうじゃな、わしがすぐに思いつくアイデアだけでも――」

「待った待った待った！」

ナイアルは声を張り上げた。

ダメだこのふたり。誰か止めないと延々と専門的な話を続けかねない。それでは何時まで経っても取材が始められない

――俺がよっぽどしっかりしねえと。

ナイアルは気を引き締めた。マイペースな天才ふたりを相手にして、どこまで自分が仕切れるものかと不安ではあったが。

「ドロシー、カメラは用があるまでしまっとけ。ラッセル博士、先ほどの話ですけれど、発明品は中央工房にあるんですね？」

ドロシーが不満そうな顔を隠さずに、それでもポチ君をポシェットにしまった。

博士のほうも新型カメラに未練の視線を送りつつ、頷く。

「そうじゃよ。とくに、ここ数年で作ったやつは、みんなあっちじゃ」

「中央工房って、あのお城みたいにおっきな建物ですねよー。ティーちゃんが働いているっていう」

「工房都市ツァイスの中心じゃ。最近は何かとあっちに行くことも増えてな……っと、ティー……ちゃん？　そりゃもしかして、わしの孫のティータのことか？」

「はい。いっしょに温泉入ったりしましたよぅ」

思い出すエピソードがそこかよっ、とナイアルは心の中だけで突っ込む。

「なんじゃ、知り合いか。それは話が早い」

「はい？」

「ティータの友人となれば、わしにとっては孫も同然」

――どうしてそうなる。

「というわけで、ちょっとひとっ走りしてだな。中央工房からパーツを持ってきて欲しいんじゃが――」

結局はそこに行きつくらしい。やれやれとナイアルは観念した。

4.

猫が出迎えてくれた。

「にゃ～～ご」

「わあ！　かわいいですねー」

「アントワーヌっていうんですよ、ドロシーさん」

抱きかかえた猫を撫でながらティータが言った。

「お姉ちゃんでいいよぅ。エステルちゃんにもそう言ってたでしょ。ティーちゃん」

「あ、は、はい。あの……ドロシーおねぇ、ちゃん？」

「はいはい」

にこにこぉっとドロシーがほほえむ。

ラッセル博士の孫娘ティータが居たのは、中央工房四階の医務室だった。受付に用件を伝えると、博士から事前に入れてもらった連絡のおかげで、ティータの居場所はすぐにわかった。

ティータ・ラッセルは、大きな蒼い瞳、金色の長い髪をした少女だ。

歳は、おそらく十歳をあまり越えていない。よく知る棒術使いの遊撃士の少女よりも、ふたつか三つは若い。ナイアルからは、まだ子どもにしか見えなかった。

もう中央工房で働いているというのだから信じられない。一人前の技術者として認められているらしい。それどころか――クーデター騒ぎのときには、重要な秘密を握ったラッセル博士とともに逃亡生活を送っていたとかいないとか……。

そのあたりも聞いてみたいところだが……。

ティータとドロシーは、会うやいなや、熱烈な再会の儀式（抱き合って跳びはね、言葉にならない叫び声をあげる、というあれだ）を敢行し、落ち着くまでナイアルはぼうっと眺めるしかなかった。やれやれ。それから、ティータは足下に寄ってきた猫を抱え上げ、ドロシーに紹介したというわけだ。

「なんで医務室に猫が……」

「この子、中央工房に住んでるんです」

ナイアルの問いに答えを返したのはティータだった。

「そりゃ見ればわかるが、問題はなんで医務室なんぞにいるのかってところなんだがな」

「この子は気まぐれですからね。まあ、猫なんてものはみな気まぐれですけど」

そう言ったのは、医務室の主であるミリアムという名の先生だ。女医である。名札の付いた白衣に両の手を突っ込んだまま、アントワーヌは、誰が飼っているわけでもなく、自由

気ままに中央工房を闊歩しているのよ、と続けた。

「動物が与える癒しの効果については、最近リベールでも注目されているの」

「へぇ」

「帝国の論文で発表されたのが数年前のことで。まあ、早い話が、この子がいるだけで、中央工房の技術者たちのストレスは、多少なりとも緩和されているってこと。なので、わたしも放任してるわけです」

ミリアム女史の言葉を聞きながら、ナイアルは、アントワーヌを撫でているドロシーとティータを見る。

——なるほど。

ドロシーはいつでもふわっとした表情をしているが、今はそれに磨きがかかっていた。

「ええと、それで、ナイアルさん」

ティータがようやくアントワーヌをドロシーに預けて、ナイアルのほうを向いた。

「おじいちゃんの発明品を紹介して欲しい、って聞いたんですけど」

「おう。そうそう」

「えっと……」

「あのじいさ——ラッセル博士は、世に出た発明品はわずかで、それの何倍もの発明をしている、って聞いた。そいつを紹介してくれると嬉しいんだがな」

ナイアルが水を向けると、ティータが困ったなという顔つきになった。おや、と思う。ラッセル博士は、孫娘に話を通しておいてくれると言ったのだが。

「あの……おじいちゃんの発明は、工房の倉庫に置いてもらってるんですけど」

「倉庫が遠いのか？　あるいは見せられない理由があるとか」

ふるふるとティータが首を振った。

違うらしい。

「地下工場のフェイさんに頼めば、すぐにコンベアで送ってもらえると思うんですけれど……倉庫にある発明品って……その……」

「ひとつならここにもあるわよ?」

医務室の奥へと消えていたミリアムが、腕の中に何かを抱えて戻ってきた。

なんだろう、とナイアルはいぶかしむ。

抱えていたものを、テーブルへと置いた。ゴトッと重そうな音が響く。

「にゃぁお〜〜ん」

ドロシーの腕の中でアントワーヌが鳴いた。

「なん……だ、こりゃ?」

「ポンテーヌ」

「はい?」

ミリアムの返事は短すぎてわからない。ティータが補足してくれた。

「おじいちゃんの作った導力犬です。導力で動く機械のペットなんです。あのその……いちおう、いぬ、です」

「……は？　いぬ？　この焼きたてパン一斤に耳をつけたようなシロモノが?」

「首輪のところにアーツを駆動させる仕掛けがあってね……」

ミリアムが、遊撃士がクオーツをなぞるような手つきで、垂れた耳っぽいものが付いたところにある金属の輪を撫でた。耳の近くに付いていたふたつの丸い窪みに、カッ、と光が点る——うぉ！　びっくりした。なるほど、これが目か。

「ポンテーヌ、待て（ステイ）!」

がしょん、と音がしてポンテーヌと名付けられた導力機械の身体がひっくり返る。

「これが服従のポーズなの」

「いやあんたいま待てって言わなかったか?」

「撫でると喜ぶわよ」

ナイアルの言葉を無視して言った。

——撫でろ、だと？　これをか？

おそるおそる金属光沢に輝く腹を撫でる。

げしょしょ、とカエルをつぶしたような声が身体の中から響いてきた。どうやら口はないようだ。

「可愛いでしょ?」

「はっきり言って気持ちわりぃ」

「残念だわ。みんなそう言うの」

ミリアムが肩をすくめた。

「まあ、けどすげぇのは認める。導力で動く古代文明の機械人形なら見たことがあるが……。こいつは小さい上に言葉を理解するんだな」

ナイアルの感想を聞いたティータが嬉しそうに頷いた。祖父の発明品を誉められたからだろう。

「四八の駆動箇所があって、二五六通りの動きができます。口頭で指示できる命令セットは一〇二四にものぼるんですよ！　本当の犬みたいに人間の何倍もの嗅覚や聴覚を持たせてあるから、例えば猟犬の代わりにしたりとか。とっても役に立つんです」

「へぇ……」

そいつはますますすごい。ナイアルはさすがはラッセル博士だと感心して。

それから気づいた。

こんな素晴らしい発明品ならば、ニュースになっているはずだ。だが、ナイアルはそれらしい記事を読んだ覚えがない。

「こいつ、何か問題あるのか?」

ナイアルが問いかけた途端に、ふいっとミリアムは視線を逸らし、ティータが笑みを引きつらせた。

5.

「実は、ポンテーヌの頭脳はこの身体の中に納まらなかったんです」

ティータが言った。

「脳が、ない？」

「はい。音声を認識して行動パターンを実行させるには、とっても賢い導力駆動の演算機がいるんです。でも、さすがにおじいちゃんも、ここまで小さくはできなくて……」

導力犬を撫でながらティータが言った。げしょしょ、と相変わらず犬とは思えない声でポンテーヌが鳴いた。喜んでいるのだろうか。

「じゃあ、こいつはどうやって動いているんだ？」

「この子の脳は、中央工房の《カペル》なんです」

「《カペル》……ってのは、確かこの工房にあるでっかい計算機のことだよな」

巨大なデータベースをもち、複雑な計算を瞬時にこなすというツァイス中央工房自慢の高性能演算処理装置だ。

確か黒のオーブメントの解析にも力を発揮したと聞いている。

「はい。ポンテーヌは、起動させると無線による導力通信で《カペル》と繋がるようになっていて、指示した命令を解釈してこの子を動かすんです、けど」

「けど？」

「あの……そんなに遠くまでは命令が届かなくって、せいぜい、動かせるのは工房の中くらいまでで」

ナイアルはようやく理解した。つまり、複雑な命令を理解して実行するためには《カペル》級の計算機の支援が必要で、しかも限られた範囲でしか動かせない。

なるほど。それでは実用にならない、わけだ。

――動かなかったら、ぬいぐるみ以下だもんな、こいつ。

「止まっちまうんじゃ仕方ねえな……」

「いえ、その」

「ん？ 違うのか？」

「動かなくなるだけならいいんです、けど……たまに、暴れたり、噛みついたり」

「か、噛みつくぅ？」

「だから、あの、口を取っちゃったんですけど」

ナイアルは導力犬を見下ろした。

腹を見せたまま耳をばたばたさせてやがった。短い脚をゆらゆらと宙を泳ぐように動かしていた。断末魔、という単語

が頭をよぎる――煙をあげたりしねえだろうな？

先ほどのラッセル工房での事件を思い出す。

なんとなく、発明品を見せてくれと言ったときのティータの反応が理解できたような気がした。

「それでも可愛いから、たまに取り出して動かしてあげてるの。倉庫に置きっぱなしだと可哀そうじゃない？」

ミリアムがポンテーヌを撫でながら言った。

「その意見には……」

「賛成してくれなくて残念だわ」

ミリアムが残念そうに言った。

「まあ、それで、こいつだけ医務室にあった理由がわかりましたが。……残りは倉庫なんだな？」

ティータが頷く。

「あの……よろしければ案内します」

「そうだなぁ。頼んでもいいか？ こっちもまあ世に出なかった発明品ってことで取材に来てるわけだし。博士の名誉を落とすような記事にはしねえからさ」

「あのあの、斬新な発明には失敗がつきものなんじゃ、って、おじいちゃんが」

「ああ。わかってる」

――天才の所業がはた迷惑なのもな。

ナイアルはちらりと相棒のほうを見た。

猫を抱きかかえていたドロシーがちょうどこちらを向く。

なんですか？ とばかりに首を傾げた。

その隙にアントワーヌが腕から逃れて床に着地。たたっと部屋を出ていってしまった。

「ああっ！ 猫さぁん！」

「逃げられたぞ。構いすぎじゃねえのか」

「そんなことないですよぅ」

「ヤキモチ焼いちゃったのかもしれませんね。みんながポンテーヌに注目していましたから」

ティータが言った。

「可愛かったのに……ぬくぬくさんでしたよー」

「あら。こっちだって、抱きしめるとひんやりして気持ちいいのよ。特に夏」

張り合うなよ、とナイアルとしては言いたい。それに冷涼さは、犬に求めるものじゃないんじゃないか？

それはさておき、仕事だった。

「じゃあ、残りの発明品を見せてくれるか？」

「はい」

発明家の孫娘は、ナイアルとドロシーの前に立って歩き出した。

腕の中に導力犬を抱えたミリアムが、手を振って医務室を送り出してくれる。

三人が昇降機で向かったのは地下だった。

6.

中央工房——。

中・高層建築物がほとんどないリベール王国において、地上五階、地下一階のこの工房は群を抜いた巨大さだ。北部の丘の上に建てられていて、何十人もの技術者が昼夜を問わずに働き続けている。

リベールが、導力器技術で頭ひとつ抜けていると他国から言われる由縁は、七耀石を豊富に産出するからだけでなく、この中央工房の存在が大きかった。

巨大な建物だけに、上下の移動には箱型の昇降機が利用されていた。もちろん階段もあるのだが、そちらを利用する者は滅多にいない。

ナイアルたちは昇降機で地下工場へと降りた。

ベルトコンベアと呼ばれる荷物の配送機の前に、ひとりの女性が待っていた。

フェイ、と名乗る。

ひとりでこの配送機を動かしているらしい。

メモ紙をティータがフェイに渡した。

「おじいちゃんの発明品は、ぜんぶ同じ番号を頭に付けて仕舞ってあるんです」

フェイが番号を計器盤から打ち込むと、コンベアが動き出して荷を運んでくる。工場内のあらゆる部署に繋がっているという配送機が、倉庫の奥からラッセル博士の発明品を選び取って運んできた。

「とりあえず、十個くらいでいいですか?」

ティータが言った。

「ああ。充分だろう。おい、ドロシー。カメラを用意」

「はぁい」

ポショットからオーバルカメラを取り出すと、あちこちいじり始めた。地下だけに明りは導力灯のみ。少し薄暗いから、その調整かもしれない。

「えっと、えっと」

届いた箱をティータが漁っている。

「あ、これはどうでしょう?」

手にした小さな品をナイアルに渡してきた。

「メガネですかぁ?」

「眼鏡だな」

それは確かに眼鏡だった。それ以外には見えない。透き通った丸いガラスを鼈甲のような赤い縁で支えていた。蔓の部分がやや太くて小さなクオーツが嵌っていた。

俺がメガネを手にすると、ドロシーがカメラを構えた。

——ちょっと待て。そうなると、ひょっとして、必然的に俺がぜんぶを試すことになるのか?

「先輩、掛けてみてください」

「あ、ああ……」

掛け心地は普通だった。度は入ってないがクリアによく見える。

「それはえっと、導力眼鏡です。蔓の右側にあるクオーツで導力器を起動させられます」

ティータが言った。

「あー。これか」

指でなぞりあげる。

「動かすと、導力波、つまり、導力エネルギーの流れを見ることができるんですよ。七耀石の鉱脈を見つけるのに役立つかもしれない、っておじいちゃんが言ってました」

「ほう、そいつはすごいな」

本当ならば画期的な発明品だ。導力波の流れが見えるなんて。

「その代り、導力波しか見えなくなります」

目の前が真っ暗になった。

何も見えない。

「はい、チーズですぅ」

シャッター音とともに、今度は真っ白な光が視界いっぱいに広がる。太陽を直接見てしまったときのよう。思わず目を背ける。身体を捻ったらバランスを崩した。

「うあっと!」

転んで、したたか腰を打った。痛い。涙が滲んでしまう。

「い、いきなり閃光なんて焚くな! びっくりするだろうが!」

眼鏡を外しながら怒鳴ると、ドロシーがぽかんとしていた。

「いえ。標準でしか撮ってないのですが。先輩がいきなりのけぞるから、何が起こったのかと……」

「なんだと?」

そこでようやく気づいた。

つまり、あの光はオーバルカメラの導力の輝きか!

腰を打ったナイアルに、ティータが申し訳なさそうな顔で謝ってくる。

「こいつは……使えねぇな」

「はい。おじいちゃんも改良が必要だって……あの、だいじょうぶですか?」

「あ。ああ。どんどん見せてくれ」

なんとか笑顔を作る。

子ども相手に不機嫌な顔をしても仕方ないだろうと思ったのだ。なんといってもティータは一生懸命に説明してくれているのだし。

　それにしても、風景を見るときは導力波が見えず、導力波を見るときは風景が見えない眼鏡とは……。それでは掛けたまま作業を続けることなどできない。
　使い勝手が悪すぎる。
　お蔵入りなのも道理だ。
「こっちは導力掃除機です」
　今度は、ピザを五枚重ねたくらいの円盤を取り出してくる。下側にモップのような毛が生えていた。駆動させると、自動で床を掃除してくれる導力器らしい。しかも、ゴミを吸い取ってくれるという。便利なシロモノに思える。
「ただ、吸引力が強すぎて、中がいっぱいになっても吸い込もうとしちゃうんです。吸い込んでいっぱいになるたびに爆発しちゃうから……」
　かえって掃除が大変になっちゃうんですよね、あ、あはは、とティータが申し訳なさそうに言った。
　試しに動かしたら、ナイアルのズボンの裾を無理やり吸い込もうとした。引き千切られ、片方の裾が短くなってしまった。
「ご、ごめんなさい！」
「いいっていいって。次だ次」
　次に見せてもらったのが体重計だ。
　単に身体の重さを計るだけではなく、いくつかの身体的な数値を同時に知ることができるという。その値が、標準から大きく逸脱していたら警告が出る。
　ナイアルが乗ると、不吉な警告音とともに、あなたは重すぎると指摘され、計りの表面が変化して、いきなり自動歩道のように動き出した！　ぐいっと足下が引っ張られ、転げ落ちそうになる。
「うおおおお！」
　落ちないように必死で走った。
「ととと、止めてくれええええ！」
「ご、ごめんなさい！　それ、停止スイッチないんです……」
　ティータが無情な事実を告げる。
　降りることに成功したときには汗だくになっていた。何度も荒い息を吐く。
　体重が減った。
　苦しそうに走るナイアルを、ドロシーが何枚も写真に撮ってくれたが、その写真だけは使わないからなと釘を刺す。
　卵ひとつを加熱してくれる調理器というのもあった。生卵をゆで卵にしてくれる導力器なのだ。だが卵しか調理してくれない。
「それ……だけ？」
「はい」
　ナイアルの視線がやさぐれつつあった。自分でも自覚できてしまう。
「ど、導力器を家庭に普及させるためには、こういうものも必要だって」
「あー……。わからねえでもないが……。こいつも爆発したりするのか？」
　倉庫にしまってあるということは、どこかに欠点があるのだろう。
「おじいちゃんが半熟卵のほうが好きなんです」
「お蔵入りの理由そこかよっ！」
　卵があったら床に叩きつけていたところだ。
「わたしはどちらも好きですよぉ」
　ドロシーが言った。聞いてないつーの！
　そんなこんなで、十点の発明品の説明をすべて聞く頃には、ナイアルは心身ともに疲れてしまっていた。ご機嫌だったのは写真を撮っていたドロシーだけだ。
　苦労に見合う記事になるかどうか微妙なところだと思いつつ。
「お……終わりか？」
「はい」
　ほっと息を吐いた。
　そのとき、注意を促すような音が部屋に鳴り響く。通信機が鳴っている。フェイが慌てていた。
「どうした？」
　一瞬で疲れが気にならなくなる。
　記者の直観だ。ナイアルには問題が起きたらしいことがわかる。
　それはある意味で、取るに足らないほどの些細な出来事で……だが、中央工房で働く人間たちにとっては重大な事件だった。
　猫のアントワーヌの姿が見えない。捜索中だという知らせだった。

（続く）

人生半キャラずらし



jdkバンドのドラマー・オカジがファルコムと音楽と人生について熱く語ります！

「イースⅣ J.D.K.スペシャル～ザ・ドーン・オブ・イース」



岡島俊治（Okaji）

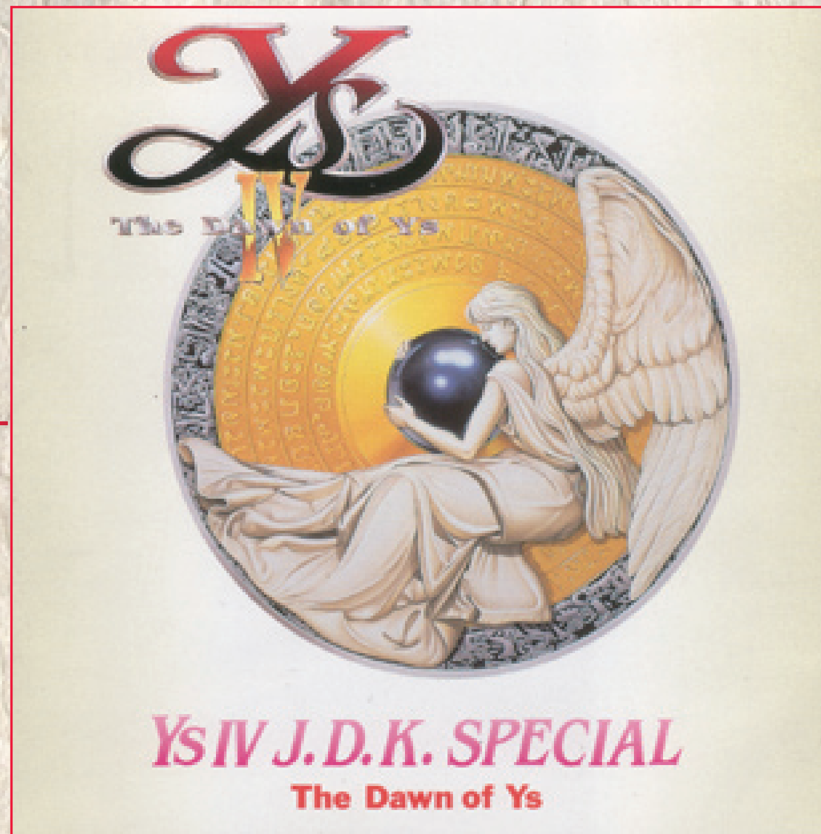
1979年6月9日生まれ
ドラマー/パーカッショニスト/作曲、編曲家/プロデューサー
洗足学園短期大学器楽科打楽器専攻卒業。
2000年、ロックバンド『HeadPhonesPresident』のドラマーとしてデビュー。
2005年、同バンド脱退後はフリーミュージシャンとしての活動を開始。様々なアーティストのサポート、レコーディング、プロデュース等を行う。
2008年より『ファルコムjdkバンド』に参加。
主な共演歴：jdk BAND、Sixh.Opera、HeavensDust、野宮真貴、植村花菜、CORE OF SOUL、DENIAL、安藤裕央、清田愛未、中村幸代、一純悠人、momokomotion、越尾さくら…etc

皆様あけましておめでとうございます！　jdkBANDドラマーのオカジです。

今年は新年早々、jdkBANDのライブだったので元旦からファルコム音楽を聴きっぱなし。休みの日も結局ファルコムゲームをプレイしていたりするので、公私共にひたすらファルコム漬けの毎日を送っております。楽しいんですけどね！（笑）

新年1月5日に日本橋三井ホールで行われたライブに足を運んで頂いた方、また、ニコ生の中継で観覧して頂いた皆様はご存知の通り、今回のライブのセットリストは「イース セルセタの樹海」の楽曲を中心にお届けさせて頂きました。セルセタの樹海でイースの世界に初めて触れた方も、往年のイースファンの方にも喜んでもらえたようで何よりです。そこで今回はセルセタの樹海の世界をより深く楽しみ、知ってもらえる一枚をご紹介したいと思います。ドドン！

「イースⅣ J.D.K.スペシャル～ザ・ドーン・オブ・イース」



以前のこちらのコラムでも何度かお話しているかとは思いますが、「セルセタの樹海」を舞台にした作品は過去にもPCエンジンから「ザ・ドーン・オブ・イース」として、スーパーファミコンから「ザ・マスク・オブ・ザ・サン」として同じテーマの作品が発表されております。こちらの2作品も実際にプレイしてみると、舞台や設定こそ同じなれど、ゲームとしてはまったく別のゲーム。ひとつの原作を元にそれぞれに違うメーカーが開発しているので、そうなっても当然と言えば当然なのですが。

音楽についても原曲はファルコムが制作しているので、同じ楽曲をそれぞれのメーカーが別のアレンジで作り直しています。勿論、それぞれに個性的なアレンジで素晴らしいのですが、そうなってくると、「そもそもの原作となっている音楽」というものに当然の事、関心は行くわけですね。

そこで、その知的好奇心を満たしてくれるアルバムこそが今回紹介するこのアルバム「イースⅣ J.D.K.スペシャル～ザ・ドーン・オブ・イース」なわけです。

このアルバムは、「セルセタの樹海」、「ザ・ドーン・オブ・イース」、「ザ・マスク・オブ・ザ・サン」の原点となっている楽曲が収録された、FM音源によるアルバムで、まさにこれこそが原作。これがオリジナルと言っても過言ではないでしょう。なにより、原曲を開発する際にFM音源で楽曲を開発しているところが本当にファルコムらしい！　このアルバムが発表されなければ実際にこのFM音源版を聴くことはできなかったわけで、僕のような古いPCユーザーからすると、「もしかしてPC98でイースⅣが発表されてたらきっとこの楽曲がそのまま流れたに違いない！」と妄想せずにはいられません（笑）。

実際、僕は、最近発表された「イースざんまい」のアレンジを制作した際には、こちらのアルバムをヘヴィーローテーションし、アレンジのアイデアを膨らませたりしました。こちらのアルバムもイースⅣの楽曲が多い作品になっておりますので、このアルバムと併せて「イースざんまい」も楽しんで頂けると嬉しいです。みんな買ってね！（笑）

それではまた次回お会いいたしましょう。ではでは！

ファルコム楽曲4,118曲をiTunesで世界111ヶ国に配信中。

(ファルコム楽曲はすべて高音質化、DRMフリーが適用されたiTunes Plusでの配信となります)

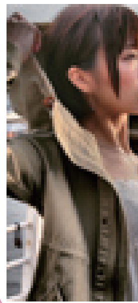
※iTunes配信中のコラム関連アルバム情報※
[イースⅣ J.D.K.スペシャル ～ザ･ドーン･オブ･イース]
価格：900円　収録曲数：全29曲

≪Falcom jdkバンドライブ特設サイトURL≫
http://www.falcom.co.jp/jdk/index.html

コテ放題

コテカナことjdkBANDボーカル小寺可南子がゲームと共に、好き放題な日々のことを描くコラム!!

▶PROFILE



日本ファルコムのゲームソングを奏でる専属バンド"jdkBAND"のボーカル。webラジオ「ファルコムラジオ"めんどくさいです…でもがんばります"」では声優水橋かおりさんと共にパーソナリティをつとめる。その他CMソング、ジングルなど活動は多岐に渡る。twitter @cana_ko_tera

第1回　プレイタイトル決定！順調なスター…ト…？

まいどおおきにコテカナです！さてこのコテ放題、今回が第1回目となります！ゲームレポがいかなる物か、そしてこの連載がどれほど過酷な物かは前回書いた通り。果たして私は無事この試練を成し遂げられるのか！つーか、そもそもどのゲームだって話ですよ？ファルコムさんってすんげぇいっぱいゲーム出してんだから。そこんとこ知ってんのかなぁ鬼編集長……（※鬼編：もちろん知ってます！）。てな不安を抱えつつもなんとかなると思ってこの原稿かいてます。私が思うファルコム作品の魅力は、ストーリーやキャラもさる事ながらやはり音楽かと！ゲーム中流れてくる音楽を励みに頑張る所存なのであります!!





2011年10月から好評配信中のWEBラジオ『ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります』の舞台裏をこっそりお届け♪

ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります
■配信日　毎週金曜日、公式HP、ランティスラジオ、ニコニコ動画にて更新。
■メインパーソナリティ　水橋かおり（『碧の軌跡』ティオ・プラトー役）　小寺可南子（『ファルコムjdkバンド』ボーカル）
■公式ホームページ　http://www.falcom-radio.com/

第64回-第65回　神田朱未（『空の軌跡』エステル・ブライト役）斎賀みつき（『空の軌跡』ヨシュア・ブライト役）

64、65回のゲストは、空の軌跡の主役キャラクターである、エステルとヨシュアを演じられた神田朱未さんと、斎賀みつきさんがWゲストとして登場。常日頃からエステル、ヨシュアコンビが大好きだと公言しているパーソナリティーの水橋さんと小寺さんは仕事そっちのけ（？）で、ゲストふたりのトークにメロメロ状態。神田さんのトークを斎賀さんが随所でフォローする姿も見られ、ゲームの外でも抜群のコンビネーションを見せつけてくれた。

▶第64回-第65回の舞台裏◀

64回では久々に支援課見習いのふたりが料理に挑戦。食べ物が痛みやすい夏が終わり、いよいよクリスマス！というタイミングでは水橋さんにクリスマス中止を言い渡されたり、なかなかチャンスがなかった料理回。ガチしおコンビの野望はまだまだ続きそうだ!?

第66回-第67回　お便りスペシャル

66回、66回は、いままで送られてきたたくさんのお便りを一気に紹介していくお便りスペシャルとなった。零えぼやイースの感想が読まれる中,なんと2011年に投稿されたお便りも読まれるというサプライズも。どんなに昔の投稿でも,きっちりキープしているファルコムラジオだからこそ、という光景だった。また、兼ねてよりリスナーから要望が来ていたプレゼント企画もこの回よりスタート。毎月一番おもしろかったリスナーに、パーソナリティー直筆の色紙が贈られることが発表された。

▶第66回-第67回の舞台裏◀

しれん課のコーナーでは、１月に行なわれたjdkバンドライブのレポートがあり、本誌で小説を連載中のむらさきゆきや先生がインタビューに登場した。これは、当日ライブでむらさき先生に出演を伺ってみたところ、快くOKの返事をいただいたことから敢行されたのだ！



今月のコテガキ

毎週更新とともに発表される、小寺さん直筆の「コテガキ」を少しだけご紹介！

▶ファルコムニュース◀

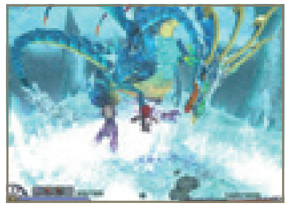
ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

イースシリーズ Windows8対応版

あの名作シリーズを最新のOSで!

日本ファルコムが誇る「イース」シリーズから４作品がWindows8対応バージョンになって登場。最高画質で美麗な世界を冒険しよう。また、パソコンのスペックに合わせた設定でノートパソコンなどでも快適にプレイが可能だ。発売されるタイトルは『イースⅠ&Ⅱクロニクルズ』『イース・オリジン』『イース フェルガナの誓い』『イースⅥ -ナピシュテムの匣-』。３月22日発売。各3990円（税込）。



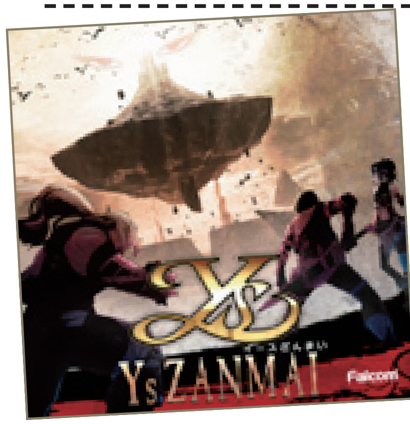




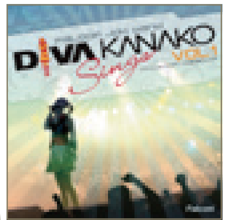
最新CD『イースざんまい』『Falcom jdk BAND Diva Kanako sings Vol.1 ～ 2』

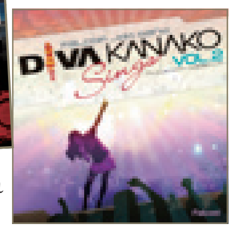
歌モノ集結!音楽で感じるファルコムワールド

イース生誕25周年を記念して、これまでの冒険を彩る数々の音楽をjdkバンドのメンバーがアレンジしたＣＤ『イースざんまい』が発売される。また、jdkバンドのボーカル・小寺可南子が歌うボーカル曲を全収録したアルバムも同日発売。２月28日発売。『イースざんまい』は2100円。『Falcom jdk BAND Diva Kanako sings Vol.1 ～ 2』は1575円。（どちらも税込）。



▲『イース セルセタの樹海』で使用された楽曲など、最新のアレンジも収録！



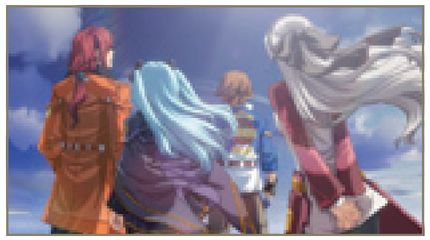


英雄伝説 零の軌跡 theBest

お手頃価格でお求めやすく!

軌跡シリーズ最新作『閃の軌跡』の発売を記念して、大人気ストーリーＲＰＧ『英雄伝説 零の軌跡』がベスト版価格で登場。巨大な都市の中でそれぞれの壁を乗り越えようとする若者たちを描いた本作は、日本ゲーム大賞2011優秀賞を受賞するなど高い評価を得ている。ロングセラーの人気作をこの機会に体験してみよう。３月７日発売。2940円。（税込）







Falcom FanArt Collection

数々の名作で多くのファンを生み出してきた日本ファルコム。
FFCでは、そんなファルコムを愛するイラストレーターの方々のイラストとコメントを毎月お届けします！

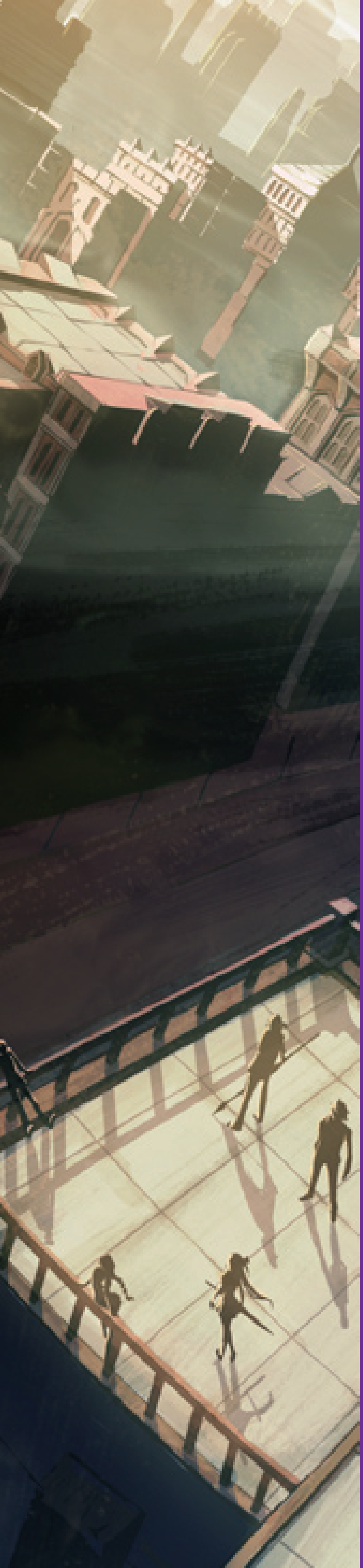


大石大祐

進化し続ける爽快アクションは流石の一言。スキルフィニッシュしたときのカメラワークがまたいいんですよね！　時間を忘れて広大な樹海を駆け回りました。いや、決して総督に褒めてもらいたくてではなくてですね…。

『イース セルセタの樹海』（2012）

日本ファルコムの看板シリーズ『イース』の25周年記念作品。ストーリーは冒険家・アドルが10代の時に体験した大きな冒険を綴った冒険日誌が原典となっている。PSVitaの機能を生かした新システムも魅力。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.24

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 大場恵美子
ライティング	宮崎洋平
デザイン・DTP	さとうだいち
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（ビーニーズ）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/
制作・販売協力	シナノ印刷株式会社

FALCOM MAGAZINE SPECIALプレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



1 1名様

❶『レーヴェ物語』最終回記念！
楽時たらひ先生サイン色紙

ついに今月号で最終回を迎えた『空の軌跡外伝 レーヴェ物語』。読者の皆さまに感謝を込めて、世界で一枚の楽時たらひ先生書き下ろし色紙をプレゼント！



2

❷那由多の軌跡
クロスクリーナー

ファルコム通販の購入特典として封入されたクリーナーを入手！ノイとポムを狙うダークみっしぃをご覧あれ！

1名様

❸jdkバンド
ボーカル・
小寺可南子
サイン色紙

新連載のコラム「コテ放題」も始まって2013年も盛りだくさん!? 小寺可南子の活躍をこれからもどうぞよろしく！

1名様 3



プレゼントの応募方法

こちらのアンケートの回答を下記のアドレスまでメールにてお送りください。
プレゼントの当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

●下記のメールアドレスをご記入ください。
●「vol.24プレゼント係」とご記入ください。
●お名前（ペンネーム可）をご記入ください。
●右記の記事一覧から、今月号で一番面白かった・つまらなかった記事をご記入ください。
●ご意見・ご感想などをご自由にご記入ください。
●希望するプレゼントの番号をご記入ください。

宛先：
件名：vol.24プレゼント係

○○○○○○○○○○
◆
面白い：
つまらない：
◆
○○○○○○○○○○
◆
1

【記事一覧】

1：英雄伝説 閃の軌跡 潜入レポート
2：『空の軌跡外伝 レーヴェ物語』
3：『みんな集まれ！ファルコム学園』
4：英雄伝説 空の軌跡
　リベール王国スナップショット
5：英雄伝説 零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～
6：jdkバンドドラマー・オカジの
　人生半キャラずらし
7：ティオのファルコムラジオ
　めんどくさいです…でもがんばりますの舞台裏
8：jdkバンドボーカル・コテカナのコテ放題♥
9：ファルコムニュース

宛先はこちら➡ falmaga@field-y.co.jp 応募締め切り 2月25日

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、賞品の発送のためのみに利用し、その他の目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後３ヶ月を越えて保有することはありません。